平成二十七（二〇一五）年度
ニューヨーク補習授業校

第二十五回
作文コンクール
入選作品集

協賛　パナソニックノースアメリカ様

巻頭言にかえて

作文コンクール　最優秀作品講評

ニューヨーク補習授業校
校長　青木　正彦

世界の生徒になりたい

前田　花帆（高等部二年）

冒頭に衝撃的と思えるほどの力強い主張。また、分かれているけれども、どちらも大事だという気持ちを「繋がれている」と表現した力に感服する。アメリカ史の授業で感じた気持ちを素直に表現した。戸惑い、悔しさ、批判、願いは、すべて冒頭で主張した気づきから来ている。心地よい程の見事な構成力と文章力である。

お母さんのふしぎな手

田村　遼花（初等部二年）

初等部二年生の作文で、このタイトルであれば、読む前に展開がある程度見えてしまう。最後は、「やっぱり、ふしぎだな。」で終わるはずである。しかし、最後の一文は、全く予想に反し、衝撃的であった。思わず感動の涙があふれ出た。作者はすべてをわかっていたのだ。母の「手」はふしぎではなく、母は「魔法」を使うわけではないことを。もう一度作文を読み返したい。心に残る映画を見たときのように。

現地校で私は何人なのかについて

モンタ－ク　鈴音（中等部一年）

現地校と補習校での自分を対比させながら、アイデンティティーについて考えている。内容としては難しいが、自分の感じたままを、素直に表現していることで、読み手に考えがわかりやすく伝わってくる。まだ答えに至っていないが、たどりついた結論に深く共感できる。

「見える」

那須　咲代（初等部六年）

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」での体験を、きめ細やかに綴っている。優れた文章力である。体験そのものも大変強烈であったが、そこに留まらず、自分の心の変化を見つめ直して、自分にもたらされたものを言葉にして確認している。「見える」の意味に納得させられる。

ゲームのススメ

豊田　夏稀（初等部六年）

題名がパロディーで笑える。書き出しも斬新で面白い。良いところを説明して終わるのかと思いきや、悪い所も説明する。さらに、鉄則なるものまで登場する。全編にユーモアがあふれ、憎めない展開が続く。「世界の皆に教えたい。」程の勢いで始まったので、最後はどれだけ力強い主張になるのか期待すると、またニヤリとさせられる。上手い。

ごめんね、まなちゃん

武田　昌泰（初等部二年）

胸を打つ作文である。まっすぐに自分の心に向き合っているからだろう。出来事を挟んで、心の動きの変化を、小気味よいテンポで表現していく。無駄のないしっかりとした構成になっている。出だしのドキッとする内容も、先に題名を見せられているので、安心して読むことができる。これは、実は計算されているのかもしれない。

大まんぞくのしき

ドネリー　優希（初等部一年）

あたかも作者の指揮を傍で見ているようだ。この臨場感。何という表現力だろう。読み手は、作者が実際に何度もこの曲に合わせて指揮をしていたことを知っているので、一緒にワクワクドキドキさせられる。仕掛けられた伏線が見事に生きている。すばらしい作文である。

わたしとようふく

中村　晶（初等部一年）

「たっぷりと楽しく書くこと」が小学一年の作文の目標だが、目標の域をはるかに超えている。その構成と文章力に感心した。何よりも内容が、実生活に裏付けされていて、説得力があり、驚かされた。将来、作者の経営する洋服店は大繁盛するに違いない。

【目　　次】

第二十五回　作文コンクール　入選作品

：最優秀賞：

◇世界の生徒になりたい
W校　高等部二年　前田　花帆
◇お母さんのふしぎな手
W校　初等部二年　田村　遼花
◇現地校で私は何人なのかについて
L－校　中等部一年　モンターク　鈴音
◇「見える」
W校　初等部六年　那須　咲代
◇ゲームのススメ
L－校　初等部六年　豊田　夏稀
◇ごめんね、まなちゃん
W校　初等部二年　武田　昌泰
◇大まんぞくのしき
L－校　初等部一年　ドネリー　優希
◇わたしとようふく
W校　初等部一年　中村　晶

：優秀賞：

◇大きいアメリカ
W校　高等部一年　岩佐　佳奈
◇戦争の教育
L－校　高等部一年　北川　澪那
◇ハイチ二〇一五
W校　中等部三年　デイビッドキャロリン美雨
◇ＵＦＯに乗って
W校　中等部三年　押川　春香
◇補習校を休んでいた二年間
L－校　中等部一年　櫻井えみり
◇海と隠れ家
W校　中等部一年　上田　真愛
◇一生散らからない部屋
W校　中等部一年　是永　睦
◇L－校がなくなる日
L－校　初等部四年　藤田　修敬
◇フルート
W校　初等部四年　関口　怜花
◇私と読書マラソン
W校　初等部四年　是永　真凛
◇この三年間で分かったこと
W校　初等部四年　竹田　桃子
◇かみのみそしる
L－校　初等部三年　マ　笑里
◇サイダープレスの日
L－校　初等部三年　ブシェ音里
◇寒かったラフティング
W校　初等部三年　高橋　侑大
◇大地忍者、さん上
L－校　初等部二年　阿部　大地
◇にわとり
W校　初等部二年　エルブリッシュ　里砂
◇ぼくとおばあちゃまのスタンプラリー
W校　初等部二年　那須　藍貴
◇はじめての一位
W校　初等部二年　阿知波　楓

：入選：

◇たこたべられるよ
L－校　初等部一年　保坂　愛子
◇バースデーパーティー
W校　初等部一年　古谷　祐太
◇おとうとが大好き
W校　初等部一年　鎌田　太進
◇わたしのいもうと
W校　初等部一年　青木菜々美

◇わたしのいもうと
W校　初等部一年　横式　美玲
◇体験入学
W校　初等部一年　ウオーカールーク一輝
◇たんじょうびかい
W校　初等部一年　山下　澄花
◇バタバタバタ
L－校　初等部二年　梅澤　花
◇漢字
W校　初等部二年　南部翔之進
◇グランドキャニオン
W校　初等部二年　中島　陽斗
◇とくべつなポスト
W校　初等部三年　藤本　怜花
◇一年たって楽しい補習校
W校　初等部三年　河合　泰吾
◇母のいない十日間
W校　初等部四年　ウオーカー美咲
◇平和の森アスレチック公園
W校　初等部四年　渡邉　喜
◇私はきのこ
L－校　初等部五年　市川　華
◇やさしいと思った事
L－校　初等部五年　イスラス　ダニエル
◇ハンガーゲームを読んで
L－校　初等部五年　福島　光
◇旅行
W校　初等部五年　鳴瀧　優希
◇綱引き
W校　初等部五年　免出　七海
◇人形の世界へ
L－校　初等部六年　猿見田美里
◇百二十秒間の経験
L－校　初等部六年　シュワルツ世音観
◇涙の支え
W校　中等部二年　加藤　和樹
◇夢のカタチ
L－校　等部二年　山口　百音
◇私のおばちゃんは高齢者
L－校　中等部三年　中村　夢乃

世界の生徒になりたい

高等部二年一組　前田花帆

私の人生は二つの国の間で分かれている。私の心は二つの国に繋がれている。けれど、ここでそれについて文句を言うつもりはない。この人生のおかげで、私は一つ以上の視点から物事を見る事の大切さに気付くことができた。

去年、現地校のアメリカ史のクラスで第二次世界大戦の事を学習した時、私は微妙な立場になってしまった。パールハーバーでの日本の残酷さについて習った。負ける事を避けられるわけがないのに、先生は、負けを受け入れる事が出来なかった日本の話をした。けれど、広島と長崎でのアメリカの残忍さの話はしなかった。日本の諦めない強さを誰も認めようとしなかった。

そして、私はただ静かに三列目の席に座っていた。私の先生は日本の戦い方を否定し続けた。第二次世界大戦は誰が勉強しても、大勢の人が命を奪われたおそろしい戦争だ。けれど、授業ではアメリカの視点一つからしかこの出来事を学習しなかった。私の国の過去が攻撃されている中、私はただ黙ったまま座っていた。本当は「え、これおかしくない？日本もアメリカのように、自分たちの国を守るために戦っていたよ。」と言いたかった。その日、私は「一つの話には必ず二つの視点がある。」の意味がよく理解できた。私はもう一つの視点をみんなに聞いて欲しかった。けれど、クラスメートや先生の反応を恐れて、何も言えなかった。

ここで、私はふと今までの学校生活で学習した事について考えた。教えられている事がらよりも、その教え方に私は注目したい。確かに、第二次世界大戦のような、アメリカの歴史においても大きな部分である物事は学習するべきだと思う。そして、過去に犯した間違いを学習すれば、未来でそういうひどい事が起きる可能性が低くなるかもしれない。けれど、世界大戦は名前が表すように、アメリカだけで起こった出来事ではない。世界の国を巻き込んだ戦争だった。だから、世界中の国からの視点をもっと考えるべきなのではないか。

誰かが気付かないうちに、にアメリカの学校システムは一つの視点からしか歴史を教えないということに慣れきってしまったのではないのか。もちろん、これは私の学校だけかもしれない。そして、アメリカの学校システムだけではないのかもしれない。あの日の授業は私にとって、嫌な話題だった。でも、きっと、他の日の授業は他のクラスメートの誰かにとって、嫌な話題であったはずだ。この微妙な立場を経験した事がある人は私だけではないと思う。私の心は二つの国の間で分かれている。そして私の心は二つの国に繋がれている。けれど、他の人は何個の国にも心をつないでいるかもしれない。こういう人の人生では、一つ一つの話は一つや二つ、それよりも多い視点、があると思う。私は、自分の二つの国をどちらも同じように大事にしている。他の人にも大事にしてほしい。それは大きな願いかもしれない。けれど、私は大きな視点に立って考えないと、何も変わらないと思う。だから、私の二つの国よりも多く視点から出来事を学習したい。

すべての視点から考えなければ、純粋な意見は得られないと私は信じている。たった一つの視点からしか見ない人は、その視点の意見が自分の意見だと考え込んでしまう。だから、私はみんなにちゃんと自分の意見を持ってほしい。クラスのみんなが本当の自分の意見を持ててこそ、やっと面白い会話になると思う。こういう会話こそが、未来を変えられる大人達を作る事が出来るのだ。私はこのような世界的な授業を受けたいが、今だと受け

お母さんのふしぎな手

W校　二年四組

田村　遼花

最初、私がアメリカの学校に転校して来た時、少し不安でした。私は、お母さんの手をギュッとにぎってから、バスに乗りこみました。あたたかかったです。でも、一人も友達がいなかったので「日本に帰れればいいのに。お父さんの転き

12×12

られない気がする。今の学び方では、私たちはアメリカという小さい世界に閉じ込められてしまう。けれど、私は世界を見たい。そして、世界的な経験をしたい。

私たちは「アメリカの生徒」ではなく、「世界の生徒」として学習するべきなのではないだろうか。

ていたことを。もしかしたら、その手が一日を楽しくさせていたのかもしれません。その時初めて気がつきました。お母さんは、ふしぎな手をもっているということを。

夏になって、ようやくやりたかった水泳を始めました。初めての日、だれが同じグループにいるか心配でした。水着に着がえた後、

12×12

んがなければ今、日本の友達と遊べていたのに。」

一日が終わって、バスからおりて、お母さんの所にかけよりました。お母さんの手はあたたかかったです。

「楽しかったよ！」とお母さんに言いました。そしてお母さんと手をつないで家へ帰りました。手をつないでいる時に、ふと思いました。朝ギュッと手をにぎっ

12×12

1

現地校で私は何人なのかについて

□校　中等部一年

モンターク　鈴音

私の家族は二つの文化を持っています。私の父はヨーロッパから来たドイツ人、母はアジア人で日本人です。ですから、私は自分がいったい何人なのかを考えると、困ってしまう事があります。私の通っているミドルスクールは、五十パーセントが韓国人や中国人などのアジア人、四十パーセントが白人、残りの十パーセントが他の人種です。全部で約千人近くも生徒がいるのに、私のように人種が違う両親を持つミックスの生徒は、私が知っている限り、たったの五人位しかいません。生徒達は、それぞれ自分が入っている人種のグループがあるけれど、私は、自分がどこに入ったらいいのかわからなくなります。

　私の中にはアジア人と白人の両方が入っています。けれど、私の学校では、白人、アジア人やそれ以外の人種の間には大きな壁があ

2

るように見えます。白人は白人だけのグループを作り、アジア人はアジア人どうしで一緒にいます。どちらのグループも他の人種の生徒をあまり入れようとしないし、お互いに話すことも少ないです。私はいつも自分が真ん中にいるように感じます。私は白人になるにはアジア人すぎるし、アジア人になるには白人すぎると感じています。特に私が六年生の時のクラスは、白人対アジア人に分かれていので、いごこちが良くありませんでした。

　私は多くの生徒が自分たちの人種で固まるのは、狭い心を持っているように感じます。もちろん、中には関係なく仲良くなれる生徒もいます。幸い、今の私には同じクラスにアジア系のジェイミーやサラ、中南米系のミア、アフリカ系のジェイドという友達がいて皆で遊んでいます。私が七年生から入ったこのクラスは、マグネットクラスなので他のクラスと離れています。小学校からクラス替えがなく、ずっと同じメンバーだったそうです。今

4

お母さんが手をにぎってくれました。その時、少し勇気がわいてきました。日本のプールより少しつめたかったので、びっくりしました。でも、毎日れん習して夏休みの終わりには、プールのはしからはしまで泳げるようになりました。

　私が好きな本は、魔法のもの語です。魔法の本ばかり読んでいるから、「本当

5

に魔法がある」と思ってしまいます。「だれだって魔法は使えるのだ。」と書いてありました。

もしも、だれでも魔法が使えるなら、お母さんも魔法を使えるにちがいありません。

　「ありがとう、お母さん。

私に勇気や力をくれて。」

のクラスが他のクラスに比べて仲がよいのは、彼らが小さい頃からずっと一緒にいてお互いをよく知っているので、人種が気にならないからかもしれません。私は彼らといるととても楽しいです。

現地校と比べて、補習校では私は自分がまったく違うように思えます。補習校では私のようなミックスの生徒も多いので、自分に合っているなと感じるのです。補習校には、日本人だけでなく、私のように片方の親が外国人で、いろいろなカルチャーや人種の背景を持った生徒がいます。けれど、ここでは人種は大きな問題ではありませんし、誰も気にしたりしません。人種や外見やどんな洋服を着ているかは、友達になるのに関係ないのです。補習校の生徒は私の現地校の生徒達よりも他の人種や文化に対して開放的で心が広いと思います。

現地校は、勉強は大変ですが楽しいです。けれど、私は現地校よりも補習校にいるとき

文芸社 20×20

のほうが安心します。なぜなら自分が受け入れられていると感じるからです。補習校では、私は自分のユニークで少し変わった生まれを人に話すことをとまどったり、恥ずかしがったりしません。むしろ、ほこりに感じることができます。私はここでは、ミックスだからといって自分を見失うことはありません。

私は自分が何人なのかについていろいろ考えました。答えはでていません。ただ、分かったことは、人種は私のすべてではないということです。本当に大事なのは、私の性格やどんなことに興味や情熱を持っているかということです。結局、人種が違っても私たちは同じ人間なのですから。

文芸社 20×20

「見える」

W校 六年三組 那須 咲代

「盲目の人の体験をして、暗い所に入るの。私、大好きなのよ。すごく楽しいからね。今年の夏、私の大好きな伯母の由理ちゃんから、ダイアログ・イン・ザ・ダークに一緒に行こうとさそわれた。

由理ちゃんは、私が夏に毎年滞在する祖父母の家の下の階に住んでいて、いつも優しくしてくれる。職場でも、多くの人にしたわれているらしい。そんな由理ちゃんが言ったその言葉に、私はすごく驚いてしまった。

私は「盲目の人は、周りの人が誰も見えないから、一人ぼっちなんだろうな」と思った。そして、私は「そういう体験は怖そうだから、嫌だな」と少し消極的になってしまったのだ。確かに、盲目の人の世界を知る事は良いだろう。けれど、由理ちゃんは何故「楽しい」なんて嬉しそうに言ったのだろう。私は、大きな疑問を心に抱いた。

ダイアログ・イン・ザ・ダーク。私のグループには、由理ちゃんと私を含む八人の参加者と、全盲のアテンドと呼ばれるガイドのひやまっちさんが居た。私達は、白杖を受け取り、薄暗い部屋でそれぞれ自己紹介をした。私は大人に囲まれ一人だけ子供だったので、ドキドキしていた。でも、私がニューヨークに住んでいると言うと、皆が「おー、すごい」とびっくりして、何だか私を少し認めてくれたような気がした。皆にニコッとされて、私は心が落ち着いた。

その後、百パーセントの暗闇に入った。ひやまっちさんが、そこには光がないので、目が慣れる事はないと教えてくれた。杖、手と足の感覚、におい、音に頼って周りを感じ取るしかない。

私の足が地面を感じ、自分の立っている場所がどんな風になっているのか見えるような

20×20

気がした。草のにおいがした時、無意識のうちに自分が草のにおいを知っている事に、私ははっとした。五感の一つが働かないと、他の感覚が鋭くなる事は知っていたが、自分の感覚がこんなすぐ鋭くなるとは予想外だった。

でも、暗闇の中で「田舎のおじいちゃんの家」に向かって歩いて行くのに一番大切だったのは、皆の声だった。道の進行方向、階段、バス停、笹、丸太橋の終わりの段差。全て、私達は声をかけ合って、無事にどこにもぶつからず、正しい方向に進んで行く事が出来た。

歩いている途中、誰かが、

「あ、ブランコがある。」

と嬉しそうに叫んだ。すると、皆が、

「咲代ちゃん、乗って。こっち。」

と私がブランコに座れるようにしてくれた。私は皆が私の事を考えてくれて嬉しくて、思わずにっこりしてしまった。暗闇の中の二人乗りのブランコの上で、私は五歳で初めてブランコがこげた時と同じ喜びを感じていた。

中で、グループの皆は最初は全く知らない他人だったのに、声をかけ合い、助け合って共に目的地に進んで行った。そこでは、年令、性別、人種、職業、社会地位等は全く関係なかった。だから、子供の私も皆と同等の立場で声を出して積極的に参加出来た。でも、明るい所に出た途端、皆が私が子供だと無意識に思い出して、私一人置いて行かれたような気がした。

ダイアログ・イン・ザ・ダークに行って初めてわかった事は、盲目の人は弱くないという事だ。視覚を使う事は出来なくても、決して無力ではないのだ。全盲のひやまっちさんやカフェの人達は、暗闇の中で私達を導いてくれた。だから、私は「障害者」や「目が不自由な人」という言葉で差別してはいけないと強く思う。もしかしたら、盲目の人の方が、目が見える私達よりも「本当によく人が"見える"」のかもしれないと私は思う。

20×20

私達は暗闇の中で、全盲の人達が営業している カフェに行った。そこで参加者全員飲み物やお菓子を注文した。すると、その全盲のお店の人達がコップに飲み物をついだり、お菓子を分けている音が聞こえた。私は、全盲の人がそんな事が出来ると思っていなかったので、びっくりした。最後にそれぞれが代金を払う時、参加者の一人が、

「お札は、どれがいくらかどうやってわかるんですか。」

と尋ねた。すると、お店の人は、お札にはそれぞれ違うマークが付いている事、そしてそれが感じられなくても、お札ごとの大きさが約五ミリずつ異なる事を教えてくれた。

ダイアログ・イン・ザ・ダークは、確かに私にとって「楽しい」所だった。暗闇の中の短い時間だけ、何だか私は小説のヒロインに自分がなって、冒険したような気がした。

暗闇の世界は、光がある世界とはとても違う。ダイアログ・イン・ザ・ダークの暗闇の

20×20

ゲームのススメ

L.L補習授業校 六年一組

豊田 夏樹

ゲームは素晴らしい。人に喜びを与え、頭をさらに良くする。僕は、それを世界の皆に教えたい。それなのに、なんで親達はゲームを悪くまうんだ。これは、僕から親達へのメッセージだ。

ゲームには、色々な種類がある。例えば、ビデオゲーム、カードゲーム、ボードゲームなどがある。どのゲームをやるかによって、その楽しさや効果が違う。

まず、ビデオゲーム。ビデオゲームは、ゲームの画面の中で、自分自身が好きなキャラクターとなって遊ぶことができる。最強の戦士となり悪を倒し、時には有名なサッカー選手(ネイマール)となり、見事なオーバーヘッドキックを華麗に決める。なんと言う爽快感。この時の気持ちはやった事がある者にしか分からないだろう。また、ゲームには何段

20×20

階ものレベルがあり、上のレベルに上がるため必死に努力をし、集中力も養われる。

次にカードゲーム。その代表はトランプだ。小さな子供からお年寄りまで一緒に遊べて、どこにでも持って行ける。だれでも知っているババ抜き、七並べ、神経衰弱など、その種類は数えきれない。カルタも日本のカードゲームの代表選手だ。ルールは簡単でも皆熱くなる。カードゲームは、家族や友達どうしの絆を強める。

最後は、ボードゲームだ。スゴロクやモノポリーなど、ボードを使ってその上を自分のコマが、ゴールを目指して駆け抜ける。そこには、天国と地獄が待っている。もう少しでゴールだとわくわくしている所に、「振り出しへ戻れ！」の残酷な宣告。そのショックで涙が溢れ、ボードにポタリ。またある時は、サイコロ一振りで、ド貧乏から億万長者へ大出世。ボードゲームは喜怒哀楽がぎゅっと詰まった濃いゲームだ。このようにゲームは素晴らしい所が山ほどある。では、ゲームにはどんな心がけが必要なのだろうか。

残念ながらそれは違う。ビデオゲームはやりすぎると目に悪い。さうに夢中になって止める事ができなくなる。人の話が耳に入らず気がつけば、恐ろしい鬼のような母がそばに立っている。多くの子供がこのような経験をしているだろう。また、ボードゲームは、時間がかかり過ぎて途中で飽きてしまったり、あまりのショックでやる気を失くしたり、時には、喧嘩の原因にもなる。

そして全てのゲームには、大きな問題が一つある。それは、運動不足になる事だ。大抵の場合、こう言ったゲームは、室内で遊ぶ。どんなに良い天気でも太陽の光を浴びず、何時間も室内で遊んでいるのは明らかに体に悪い。では、どうしたらいいのだろう。

そこでぼくはこの四つの鉄則を作った。

その一、ゲームをやる前は、良い子でいろ。親が思わず、「うん、遊んでいいよ。」と言ってしまうぐらい良い子でいよう。

その二、時間を守れ。親が決めた時間を必ず守り、どうしても終われない時は、「後、五分で止めます。」と断言し、心が五分で終わらせよう。

その三、ルールを守り楽しく遊べ。ゲームを始める前に皆でルールを確認し、負けても勝っても文句をまわない事を誓おう。

その四、ゲームの前に運動せよ。ゲームをやる前に、少なくとも三十分は運動しよう。脳が運動によって活性化され、勝てる可能性も高くなる。一石二鳥だ。この四つの鉄則を守れば、ゲームは、今まで以上に、楽しく素晴らしい物になるだろう。

もう一度まおう。

ゲームは、素晴らしい。けれど、それはゲームをやる人の心がけ次第だ。どうか親の皆さん、もっと僕達にゲームで遊ばせてください。

20×20

20×20

ごめんね、またなちゃん

W校 二年一組

武田昌泰

またなちゃんは、十才のお姉ちゃんだ。ぼくは、何をやってもまなちゃんにかてない。ただ一つだけかつ方ほうは、いやがらせだ。

たとえば、またなちゃんにいやなことを言われるとぼくはパンチやキックをする。またなちゃんがトイレに行き

12×12

晴らしい所が山ほどある。では、ゲームには本当に良い所しかないのだろうか。

残念ながらそれは違う。ビデオゲームはやりすぎると目に悪い。さうに夢中になって止める事ができなくなる。人の話が耳に入らず気がつけば、恐ろしい鬼のような母がそばに立っている。多くの子供がこのような経験をしているだろう。また、ボードゲームは、時間がかかり過ぎて途中で飽きてしまったり、あまりのショックでやる気を失くしたり、時には、喧嘩の原因にもなる。

そして全てのゲームには、大きな問題が一つある。それは、運動不足になる事だ。大抵の場合、こう言ったゲームは、室内で遊ぶ。どんなに良い天気でも太陽の光を浴びず、何時間も室内で遊んでいるのは明らかに体に悪い。では、どうしたらいいのだろう。

そこでぼくはこの四つの鉄則を作った。

その一、ゲームをやる前は、良い子でいろ。親が思わず、「うん、遊んでいいよ。」と言ってしまうぐらい良い子でいよう。

その二、時間を守れ。親が決めた時間を必ず守り、どうしても終われない時は、「後、五分で止めます。」と断言し、心が五分で終わらせよう。

その三、ルールを守り楽しく遊べ。ゲームを始める前に皆でルールを確認し、負けても勝っても文句をまわない事を誓おう。

その四、ゲームの前に運動せよ。ゲームをやる前に、少なくとも三十分は運動しよう。脳が運動によって活性化され、勝てる可能性も高くなる。一石二鳥だ。この四つの鉄則を守れば、ゲームは、今まで以上に、楽しく素晴らしい物になるだろう。

もう一度まおう。

ゲームは、素晴らしい。けれど、それはゲームをやる人の心がけ次第だ。どうか親の皆さん、もっと僕達にゲームで遊ばせてください。

20×20

たい時、ぼくが先に入る。
また、まなちゃんの読みかけの「コナン」をかくしたりする。それで、まなちゃんがないたりおこったりすると、ぼくは、
「やった。がったせ。」
と心の中でさけぶ。
だけど、この前ぼくは、右手をけがして、食じやきがえを一人でやることができなくなった。その日はマ

マがてつだってくれたけど、つぎの日からは、まなちゃんがきがえやはみがきをたすけてくれた。とてもやさしくて、ありがたかった。
その時、ぼくは今までひどいことをしたなとはずかしく思った。そのはんたいに、まなちゃんは、心が広いなと思った。ママは、
「まーくんは、まなちゃんに定をむけてねられないね。

これからは、その分まなちゃんにいいことをいっぱいおがえししてあげなさい。」
とぼくに言った。ぼくは、
「はあい。」
と小さい声でへんじをした。
これからはもうまなちゃんにいやがらせはしない。でも、またしちゃうかもしれない。その時は、けがのことを思い出して、
「ごめんね、まなちゃん。」

とすぐにおやまるようにしよう。

大まんぞくのしき

L工校一年二くみ

ドネリー　優希

僕は、きょ年一年かん東京にすみました。その一年かんで一ばんたのしかったことは、東京こうきょうがくだんのしきをしたことです。

僕はクラッシック音がくが大好きです。とくにムソルグスキーの「てんらんかい

人とはやりたいんだけど、きんちょうするなあ。」とおもいました。だけど、ゆうきをだして、手をあげました。そしたらえらばれました。おどろきました。

ステージのかいだんをあがるとき、もうきんちょうしていませんでした。「やるしかない。」とあたまのなかで、じぶんにいいました。しき、しゃのおじさんが「ビ

の絵」やバッハの「ブランデンブルクきょうそうきょく」がきこえています。なので、げいじゅつげきじょうのフィリーコンサートがあったとき、「やったあ。」とおもいました。

コンサートのまんなかで、しかいのおねえさんが「しきをしてみたい人いますか。」ときき、ました。僕は、はじめ「どうしようかなあ。ほ

ぜーのカルメンのしきをするよ。」と僕にいいました。僕は「うちで、いつもしきをしてるからできるぞ。」とたのしくなってきました。台の上に上がって、オーケストラの人たちを見ると、八十人ぐらいでした。

「これはほんとうのコンサートだ。僕がはじめるんだ。」僕は、りょう手をあたまの上高くふり上げました。

みんなのかおを見ると、かまえて、僕をじっと見上げていました。僕は、ホールの一ばんうしろの人までが音がはっきりきこえるようにおもいっきりうでをふりおとしました。いっせいに「ダンッ。」と音がしました。たのしくしゃをつづけました。おわったとき、大きなはくしゅをもらいました。とてもいい気ぶんでした。

12×12

日ようにくみ、さむい日ようにくみ、天気にかんけいなくちょうせつしやすいようふくにくみという かんじです。

わたしがよくふくをえらぶときは、いつもその日のテーマをまずきめます。わたしは、いつもテレビや本を見たときに、出てきた人のかっこうから、いろいろなアイディアをもらいます。

12×12

たとえば、赤ずきんちゃんのかっこうからは、赤とベージュをくみあわせると、かわいくなることがわかったので、そのくみあわせをあたまの中にいれておきます。だから、わたしのあたまの中は、ほとんどかわいいろやもようのくみあわせでいっぱいです。もしその日きめたテーマが人ぎょだったら、水いろのヒラヒ

12×12

わたしとようふく

W校一ねん一くみ

中村 日日

わたしは、おしゃれが大すきです。つぎの日にきるようふくや、かみがたをまいばんじぶんでかんがえてからねます。かんがえるときは、まずよういふくだんすから、いろんな天気になうようふくを七くみぐらい出します。たとえば、あつい

12×12



ラのスカートを下にはいて、上に、きみどりのTシャツをあわせます。水いろときみどりがあうことを、とりのずかんで見たことがあるからです。

いま、わたしは、うすいピンクのワンピースに、白いカーディガンをきています。けさケーキがたべたかったので、きょうのテーマは、いちごクリームのケーキです。

大きくなったら、ようふくやをひらきたいです。うられているようふくは、どうぶつや、しょくぶつや、ようせいなどいろいろなテーマのおしゃれなものです。ゆうめいなおみせになったら、みせを大きくしてたくさんおきゃくさんにきてほしいです。

大きいアメリカ

高等部一年一組　岩佐佳奈

アメリカは全てが大きくてたくさんある国だ。食べ物も、家具も、人も。その「大きさ」はアメリカの特徴でもあり、大切な文化でもある。しかし、日本という何でもコンパクトにする国に二年前まで住んでいた私からすると、時々その特徴が「無駄」に思えて仕方がない。

例えば、アメリカではどこに行くにしても車が必要だ。なぜなら、国土面積が広く、一つ一つの建物との距離が遠いからだ。車を持っていない家庭はないくらいだ。しかし、それは排気ガスの大量発生を意味する。そして、地球環境の悪化に繋がる。私が日本で車の必要性を感じたのは、東京から名古屋に行く時ぐらいだった。それがアメリカに来てからは、車なしでは友達の家にさえ行けなくなった。

二つ目の例は、アメリカの大量生産をする習慣だ。何でも大量生産をする。食べ物も、学校の授業で配布されるプリントも、冷房や暖房の温度も。物価が安いし、足りなくなることを防げる、というメリットがあるかもしれない。しかし、それがまさに無駄なのだ。私が一番それを強く感じるのは、学校でだ。授業に行くたびにもらう夥しい数のプリント、夏なのに凍えるほど寒い教室、誰も食べないであろう大量に残ったカフェテリアの食べ物。日本のように、書き込むことの出来る個人の教科書にするか、ただノートを取るだけにした方が遥かに無駄が減る。教室の温度調節は、体温の高いアメリカ人でさえ寒いと言う程だ。食べ物は需要と供給が成立していないように思える。しかも、生徒が食べ物を何の躊躇もなく残して捨てたり、投げたりして遊んでいる。食べ物を粗末にしないという考えも、大量生産のせいで失われているような気がする。この無駄もまた地球環境の悪化に繋がる。

大きさはアメリカの個性でもあり、文化だ。しかし、なぜ先進国なのに地球環境保護にここまで協力的じゃないのか、という疑問に対して、私は自分なりに答えを出した。それは、アメリカ人の「他人を気にしない」という悪い特徴が出ているのだと思う。そう考えると、日本人は「他人を気にしすぎる」という悪くもあり、良くもある特徴がある。だから環境改善にはとても積極的なのだと思う。食べる量を削れば体重も削られるように、生産量や建物の体積を削ることで、環境改善にも繋がり、アメリカ人の肥満率も下がるだろう。

そして先進国のアメリカなら、もっと地球環境の改善に貢献して、その広大な国土を活かして、無駄なものではなく、不足している物を埋めていける事をして行って欲しいと思う。例えば、風力発電の建設の問題のひとつに、騒音問題がある。しかし、その広大な、空いている土地を使って風力発電施設を建てたら、その問題が解決されるのではないかと思う。

日本で育った私は、こちらに来てから文化の違いに沢山の驚きを感じた。しかし、環境保護を唱えるわりには、あまりにも無駄の多いアメリカの日常生活には矛盾を感じてしまう。国の長所を活かして、未来の地球の環境保護のために何ができるかを、まず学校で教えて実行して欲しいと思う。大きいアメリカだからこそできる、地球や未来の人類に優しい生活を目指してくれることを願う。

1

戦争の教育

北川れな

日本では世界で最も歴史が深い国での一つです。その歴史には戦争、平和、文化がいっぱい結まっています。日本の歴史で最も重大な出来事の一つは、第二次世界大戦です。

第二次世界大戦後、日本はとても後悔の気持ちを感じた国でした。原爆を広島と長崎に落とされ、多くの人が亡くなり、日本は敗北しました。それをきっかけとし、日本はもう絶対に戦争を起こしたり、戦争に参加したりしないことを憲法で決めました。これは日本にとって、一番大切な『想い』だと思っています。日本をいつまでも平和に、大切にするという決意を持って日本は未来に歩み始めました。日本の未来を明るくしたい、だからこそ戦争やそれに伴う痛みと苦しみをわかってもらいたいという作家が、幾つもの戦争に関する本を出し、図書館で貸し出ししたり、売られたりしました。その一つ、『はだしのゲン』は戦争の激しさ、苦しみ、寂しさを語る漫画です。子供が読みやすいように、漫画で描かれています。『はだしのゲン』は第二次世界大戦を生き抜く少年の話で、『ゲン』が感じる戦争の悲劇を未来の子供達に伝えたいという思いで描かれています。

だが、最近になって、その本の貸し出しに反対する親が増えてきています。今までの『はだしのゲン』は衝撃が強いという理由でその貸し出しや販売を禁じたりする図書館や本屋さんが増えてきました。更に学校でも貸し出しを止めたり、その本を紹介することまで禁じるようになってしまいました。

戦争が始まった頃、私のおじいちゃんとおばあちゃんは八歳と七歳でした。夜は防空壕の中で暮らし、昼間は森の中に避難しながら暮らしていたと語っていました。今の時代は戦争もなく、食べ物も豊富で、幸せに暮らせるのは奇跡だ、と言っていました。今の時代がどれだけありがたいかを若い子供たちに

文芸社 20×20

2

文芸社 20×20

3

知ってほしい、だから近所の図書館や本屋さんに『はだしのゲン』の漫画をもう一度置き子供達に貸し出ししてほしいと言っていました。

衝撃が強すぎるという理由で戦争の教育を止めたり、禁んじたりするのは間違いだと思います。今、日本が平和なのは、歴史に残された悲劇のおかげかもしれません。戦争の理由や現実を教えなかったり、習うことを禁じることは、日本の大切な歴史を教えないのと同じだと思います。

衝撃が強いからこそ貸し出しと販売を進めるべきです。衝撃が強いから、戦争の悲惨と怖さがよくわかります。絵で見えるからこそ戦争がもう少し現実的に感じられます。

親は、衝撃が強い絵や言葉を子供達に見せたくない、影響を受けられたくないと思っているでしょう。しかしその衝撃を知らなかったら、子供達はどうやって戦争の悲劇と影響がわかるのでしょうか？終戦直後に書かれ

文芸社 20×20

4

た漫画だからこそ、気持ちをそのまま伝えることができます。

戦争の教育はやめるべきではありません。戦争の教育は、すなわち、平和の教育でもありあると思うからです。

文芸社 20×20

ハイチ２０１５年

中等部三年一組　デイビッド美雨

私は、この夏六月二十七日から七月三日の間、教会の青年部の一員としてハイチに行きました。

私の通う教会には大きなハイチコミュニティーが有り、ハイチの田舎にある教会とパートナーシップを結んでいます。２０１０年に起きた大地震後、私の教会はハイチの人々のために出来るだけの援助をしています。

青年部での勉強を全部終了した後に、このハイチ伝道旅行に行くことは何年も前から予定されていました。たくさんのメンバーがハイチに行けるように色々な方法で募金を集める為にベークセールやムービーナイトなどの様々なイベントをしました。６ヶ月の募金活動で子供６人分と大人４人分の募金を集める事が出来ました。

両親と離れて海外に旅行することは、この伝道旅行が初めてでした。しかし、私はそんなに怖いとは思いませんでした。なぜなら、私は教会の青年部の仲間のみんなと小さい頃からずっと一緒に過ごし、みんなよく知っていて、私の二番目の家族と言う存在に近いからです。

私は、この旅から何を得るのか全くわかりませんでした。過去の旅の写真を見せてもらい『面白そうだな！』ぐらいしか思いませんでしたが、この旅が始まるとすぐに自分の認識の甘さに気付きました。

最初の日は朝早く起き、飛行場に向かいました。ニューヨークからフロリダへは約３時間、フロリダからポルトープランス（ハイチの首都）までは約２時間でした。ハイチに到着した直後、地元の人々に囲まれました。

「荷物持ちますか？助けは要りますか？」

と仕事を得る為に必死に聞いてきました。しかし、私のグループのリーダーから外に出る前に「飛行場に着いたら、まっすぐに車に行きなさい。地元の人々からの助けを絶対に受けないように。彼らはお金だけを尋ねてくるから。」と注意されていたので言われた通りにしました。ハイチに入って１５分経つ前に、もうこの国の貧しさがよく分かりました。

一日目はポルトープランスにあるホテルに泊まりました。カリブ海の島にあるリゾートホテルとほとんど変わりなくてとても綺麗な場所でした。その後、街中を歩きましたが私のグループ以外、外人が一人もいませんでした。このため、私達は多くの注目を集めました。露天商で小さなブレスレットを買おうとしましたが、また地元の人々に囲まれました。

「僕の絵を買ってください！5ドルだけだよ！」

と矢継ばやに言ってきました。またどのくらいこの国が苦しんでいるのかを感じました。

この後、ハイチの国立歴史博物館に行きました。ここでハイチについて多く学びました。

二日目は本来の目的である田舎の教会へ向かいました。最初はバスに乗り、その後、バンを借り現地まで行く事になりました。ハイチでは全ての道路が舗装されているわけではないので村から村への移動がかなり厳しいです。バス停から田舎の教会への道も凸凹で大変でした。

着いた瞬間、最初に目に飛び込んだのはたくさんの子供達の笑顔でした。彼らは私達を見ることに非常に興奮していました。そしてこの日、私は始めてハイチの地元の食べ物を食べました。鶏の唐揚げの山羊バージョンが出てきました。初めて体験する食感で楽しめました。

次の日から一週間、私は教会のキャンプに通ってくる子供達とたくさん遊びました。子供達は私達に地元の踊り、歌、ゲームを教えてくれ、とても素晴らしい時間を一緒に過ごしました。言葉の壁があったのでみんな互い

にわかり合うためにはかなりの努力が必要でした。彼らの言葉も少し覚えましたが、私の発音が下手だったので、いつもみんなが笑っていました。笑いの絶えないとても明るく楽しい毎日でした。

残念ながら四日目に私は熱を出し、寝込んでしまいました。私が休憩している合間にたくさんの子供達が心配して

「大丈夫？」

と聞いてきてくれ、それが私を幸せな気分にしてくれました。このとき、言葉は通じなくても友情がよく伝わってきました。

私のグループのみんなはハイチとアメリカの文化の違いに大変びっくりしていました。私はお父さんの故国のインドでこういう違いを見たことがありましたが、ハイチの貧しさはそれ以上で少し驚きました。この旅で今まで知らなかった世界に触れ、またこの経験がいろいろなことを考える機会を与えてくれました。これからは、自分の生活の中の小さなことにも感謝したいと思います





UFOに乗って

中等部三年一組　押川春香

八月十八日。テニスコートに足を踏み入れた私は、素直に「何これ」と思わざるを得なかった。周りにはネックレスやサングラス、ピアスをした金髪の人たちがたくさんいる。しかも、大きい。そして何よりここが今までとは全く違う異星のような場所であることを示すのは、その人たちがとても発音の良い英語で話していることだった。私は圧倒され、動けなくなり、泣きたくなった。だから現地校なんて、アメリカなんて嫌だと思ったのに。

ここは、アメリカの現地校。私は、八月十日にアメリカにやって来たばかりだ。小学生に頃は、転勤なんて他人事だと思っていたけれど、中学一年の時に香港へ。そして中学三年の夏、二回目の父の転勤でアメリカに来た。日本から離れるのは嫌だったけれど、香港の日本人学校で過ごした日々は楽しかったし、何より日本に近かった。今回もアメリカで現地校に行くということに不安はあったが、「なんとかやっていけるかな」などと気楽なことを考えていた。でも、転校というのは嫌なことだ。しかも、日本から遠く、違う言語の世界に飛び込むのだから、やっぱり嫌だった。でも、英語が難なく話せるようになった自分を夢見て、現場に飛び込む前の心境は、不安八割、期待二割、といったところだった。

そして八月十八日、初めて学校に行く日。テニスコートに足を踏み入れた私は、素直に「何これ」と思わざるを得なかった。今からスポーツをするのだというのに、サングラスにネックレス。外見や身だしなみ、言語の違いと、自分はラケットにボールも当てたことがない、テニス超初心者だということが後押しし、私は気後れしてしまった。ひとりで突っ立っている時間がものすごく長く感じた。早くこの場から立ち去らないと、本当に涙が出てきそうだと思った時、救世主が来てくれた。キャプテンだった。その子は、私にどこから来たのか、などの質問をして去っていった。初日から、アメリカ人と話してしまった。私は、自分が何をしたわけでもないのに、ちょっとした優越感にひたっていた。そして、やっぱりここでなら、それなりにやっていけるかも、と思った。

そして九月に入り、本格的に授業が始まった。授業の内容は全く理解できないし、宿題が多くて睡眠時間は前と比べると圧倒的に減った。おまけに、放課後には空振りだらけのテニスの練習だ。私は、毎日のように冬が来るのを楽しみにしていた。冬になればもう少しましな現状が待っているだろうし、自分の好きなバスケもできる。でも、少し考えてみると自分でちょっと成長したかも、なんて思ってしまう。毎日大変なことが多い分、小さいことに嬉しさを感じられるようになった。それに、あんなに異星人に見えた子の学校の先生や生徒達も、困っていれば助けてくれるし、優しくしてくれる人もいる。それでも、まだ異星人であることに変わりはないが。いつも色々なことを教えてくれる日本人の子にもお世話になっている。その子を見ていると、最初の一年間が成長の鍵なのだとよくわかる。そして、私もその子みたいになりたいと思う。たくさんの人と繋がって生活していることに今さら気付く。

ここは、アメリカ、そして英語が飛び交う現地校。私はまだまだ未熟な異星人だ。でも、この先、異星人ではなくなる予定の異星人だ。国同士の間に立ちはだかる壁、言語と、自分自身と奮闘しながら、毎日どれだけ小さくても進んで行く。明日からも、異星人である自分にサヨナラを言うため、少しずつ進んで行こうと思う。

「補習校を休んでいた二年間」

L工校　中等部一年　櫻井　えみり

私は初等部一年生から補習校に通って五年生の一学期で退学しました。それは、公立の現地校から私立の中学に移るための勉強をするプログラムに受かったからです。土曜日に一年半の間このプログラムで勉強することになりました。補習校を辞めると決まった時、「もう宿題をしなくていい」と、うれしかったのを覚えています。しかし、この時、これから私に何が起こるのか全く知らずにいました。

このプログラムでは、今まで体験したことのないことが二つありました。

一つ目は、受かった百二十五人のほとんどが、アフリカ系（黒人）でした。今まで私の現地校はミックスカルチャーでマイノリティーが多かったし、私の親しい友達はアジア人が多かったので、その中では私は目立ちませんでした。しかし、このプログラムのコミュニティーの中では私は目立って戸惑いました。

プログラムの初日、十五人ずつのクラスですぐに仲良くなった三人は、オバマ大統領のようにお父さんは黒人でお母さんがヨーロッパ系（白人）だったり、黒人と中国人のハーフだったり、黒人の様に見えて中南米系（ヒスパニック）だったりと、いろいろと違いがあることがわかりました。授業を一緒に取り始めると、自分と周りの肌の色の違和感が無くなってきました。黒人社会の中の私ではなく、毎週一緒に勉強し助け合う友達と私でした。

二つ目は、今まで公立の学校では学ばなかったことを勉強した事です。聖書や旧訳英語やアメリカの問題点のリサーチとプレゼンテーション、理科の実験では死んでる子豚の解剖もしました。新しいことを吸収するには、がむしゃらに前に進むしかありませんでした。

卒業式の前にコネチカットにある寄宿学校で過ごす旅行は楽しみにしていました。しかし、これもサバイバルの一つで、夜中に起こされ土砂降りの雨の中での非難訓練もありました。寒いは思っていたほどきれいではなく、虫が出て怖かったのでみんな一部屋に集まって、寄りそって寝ました。

プログラムの途中で辞めたり辞めさせられたりして、最後に残ったのは九十三名でした。卒業式では一人一人の名前とこれから通うそれぞれの学校の名前が呼ばれました。私だけでなく、会場にいたみんなは、お互いのことをライバルだったのではなく、同じゴールに向かってしんどかった勉強と苦しかった時間を一緒に分かち合った大切な仲間だったと感じていました。

その後、私は七年生から一人で地下鉄に乗ってクイーンズからマンハッタンにある私立に通い始めました。ここでは今までと反対で、ほとんどの人が白人です。ブロンドヘアーの中で私の黒髪が目立ちます。しかもユダヤ人でお金持ちの家族が多く、ユダヤ教の成人の

お祝いの招待状がこの一年間で次々と送られてきました。パーティー会場はマンハッタンの高級クラブや有名な場所で、みんな正装して夜中までダンスをしたり写真を撮ったりして遊びます。「十三歳にふさわしくない時間と場所だから」といって、お母さんは初め行くのに反対でした。しかし、プログラムから、社交の場に出ることは大切なことだと参加するように勧められたので、私はほとんど行きました。最初だけドキドキしましたが新しい友達と楽しい時間でした。

新しい学校の授業では少人数なので、丸いテーブルにみんなが輪になって座りお互いの顔を見て授業に参加しやすくなっています。

バートナーやグループを組んでする課題も多く、自習時間に集まって助け合います。学年投票で私が「七年生の思い出」のスピーチの代表に選ばれた時は、新しい友達に認められたようでとてもうれしかったです。

面白いカリキュラムをたくさんありました。

し、これもサバイバルの一つで、夜中に起こされ土砂降りの雨の中での非難訓練もありました。寒いは思っていたほどきれいではなく、虫が出て怖かったのでみんな一部屋に集まって、寄りそって寝ました。

プログラムの途中で辞めたり辞めさせられたりして、最後に残ったのは九十三名でした。卒業式では一人一人の名前とこれから通うそれぞれの学校の名前が呼ばれました。私だけでなく、会場にいたみんなは、お互いのことをライバルだったのではなく、同じゴールに向かってしんどかった勉強と苦しかった時間を一緒に分かち合った大切な仲間だったと感じていました。

その後、私は七年生から一人で地下鉄に乗ってクイーンズからマンハッタンにある私立に通い始めました。ここでは今までと反対で、ほとんどの人が白人です。ブロンドヘアーの中で私の黒髪が目立ちます。しかもユダヤ人でお金持ちの家族が多く、ユダヤ教の成人の

お祝いの招待状がこの一年間で次々と送られてきました。パーティー会場はマンハッタンの高級クラブや有名な場所で、みんな正装して夜中までダンスをしたり写真を撮ったりして遊びます。「十三歳にふさわしくない時間と場所だから」といって、お母さんは初め行くのに反対でした。しかし、プログラムから、社交の場に出ることは大切なことだと参加するように勧められたので、私はほとんど行きました。最初だけドキドキしましたが新しい友達と楽しい時間でした。

新しい学校の授業では少人数なので、丸いテーブルにみんなが輪になって座りお互いの顔を見て授業に参加しやすくなっています。

バートナーやグループを組んでする課題も多く、自習時間に集まって助け合います。学年投票で私が「七年生の思い出」のスピーチの代表に選ばれた時は、新しい友達に認められたようでとてもうれしかったです。

面白いカリキュラムをたくさんありました。



冬の三か月間は、普段の科目が減って、六年生からは七年生まで合同の演劇など自分の好きなクラスが取れます。他にもラジオプレイクにコーラス部で練習したり、理科クラブでロボットコンテストに出たり、ギターブの課外授業があるなど、毎日ワクワクして、この学校にきてよかったと思いました。

新しい学校に慣れてきた時、お母さんが補習校に戻るか聞きました。私は運動会のリレーなどで賞をもらった楽しい思い出と、クラスメートにまた会いたかったので戻ることにしました。

補習校を辞めてから中等部一年生に戻るまでのおよそ二年間で、私の周りは変わりました。私は多人種社会の中で過ごし、格差社会の中で暮らしています。私はそれを楽しんでいます。今のところ問題なし。私は私。また見ぬ新しいことを、これからも楽しんでいきます。

20×20

海と隠れ家

中等部一年一組　上田真愛

私はこの夏休み、ケープコッドに行きました。そこは、マサチューセッツ州の海に面している土地の一番先端にあります。私はナウセットというイーストハムにある海の見えるコテージに泊まりました。私は、ここでお父さんと一緒に波に乗るために、ブギーボードを用意していました。そこのコテージの庭から、細い秘密の道が通っていてその道を抜けるとビーチにつながっています。

コテージに着くとすぐにビーチに行きました。海はすごくきれいで、砂は冷たくて気持ちいいです。早速買ったブギーボードを脇に抱えてお父さんと一緒に海に走って行きました。海の水は冷たくてびっくりしました。いつも行くコネチカットの海より何倍も冷たかったのです。しかも、海岸が石だらけで痛いし、水の中に入ると、急に深くなります。でも、引き潮なので足もつきます。

いよいよ海に入ります。水は冷たく、足を入れるたびに引き返してしまいます。波は小さな砂利を運んでくるので足を打ちます。何度も何度も岸に引き返してしまいます。お父さんが先に海に入るのを見て、私は意を決して冷たい水の中に入りました。まずはひざ、そしてもものところまで水につかりました。波が近づいてきました。私は一気にボードに乗っかり水を蹴りました。「冷たい！」体が一気に固まったような気がしました。でも波が押し寄せてきます。冷たい感覚が一気になくなり、波に乗るのに必死になりました。また高い波が押し寄せてきます。私は波に任せて波の上に浮きます。後ろを見ると、沖まできたと分かりました。その先にはお父さんが次の高い波を待っている姿が見えました、私も、波に乗れるように待ちます。何度も何度も波が過ぎ、やっといい波が来ました。私は波に

追いかけられるようにバタ足をし、波の前で波と同じスピードで必死にバタ足を続けました。波は私を前に押し出してくれます。どんどんどんどん私は岸に近づきます。「シューーーー」私は泡のような白い波に巻き込まれ岸まで勢いよく波に押されました。「最高！」すごくいい気分でした。何回も何回も波に乗りました。楽しくて楽しくてとまりません。波乗りをしている間に、友達ができました。その子の名前はマチルというフランス人です。カナダのケベックに住んでいます。手と足がつりそうだったけれど、波が来るたびにお互いの顔を見合わせて夢中で一緒に波乗りをしました。夕暮れ近くまで波に乗りました。

私は夕暮れまで海にいました。コテージの帰り道、海岸の隣の小さなお店に寄り、夕食のためにホットドッグ、オニオンリング、フライやシーフードを購入しました。この土地の名物です。お母さんが食べ物ができるのを待っている間、私とお父さんは海に行き、海岸に沿って歩いていました。私はお母さんが呼んでいる気がし、お父さんと帰りました。確かにお母さんが呼んでいました。お母さんは食べ物を全部持とうとしたところでした。「いいにおい！」「わーすごくおいしそう」と思いながら山盛りのごちそうを持つのを、私とお父さんでお母さんを助けました。そして、秘密の道を通ってコテージに帰りました。暗闇の向こうでは海の音が聞こえます。波は海岸に当たります。そのたびに私は、波から呼ばれているように聞こえます。「また波乗りしにこいよ」と言っているようです。私はきっとまたこの海に、そしてこの隠れ家のようなコテージに泊まりに来ます。

一生散らからない部屋

中等部一年一組　是永陸

今年の夏休みで一番の思い出になったのは自分の部屋の片付けです。普通の片付けではありません。一度やると、もう一生散らからなくなるというやり方でやりました。これまでの僕の部屋はいつも足場がなく、机の上は本やプリントで埋まっていてベッドの上はたくさんのおもちゃや服がのっていました。探し物には三十分かかることもありました。

僕がやった方法は近藤麻理恵さんの『人生がときめく片づけの魔法』にかかれてある物です。この本は父と母が薦めてくれました。やり方はとても簡単です。まず手に取ってみて、ときめかない物は捨てて、そして次にときめく物の置き場所を決めるという手順に従うだけです。本には「捨てるのが簡単な物から始めて、判断が難しい物はできるだけ後回しのした方がよい」とも書いてありました。まず僕は家中にある自分の服を探してリビングに集めました。服の量は思ったより多く、山のようになりました。こんなに服を持っていたなんて知らなくてびっくりしました。一つ一つ手に取ってときめくかどうか試してお気に入りの服はとっておいて、小さくなったりしてもうきなくなった物はいらないというふうに分けました。

次に集めたのは本です。「服の次に簡単」と本に書かれていました。自分の本を全部リビングに集めたときは床が全部本で埋まってしまいました。本は少ししか捨てられませんでした。本は種類ごとに分けてとりあえず廊下に置きました。

プリント類はそんなにありませんでした。前からほとんど捨てていて、片づけているときに出てきたものもほとんど捨てました。しかし五年生や六年生で書いた作文が出てきて、作文は大変だったのを覚えているので取って

おきました。最後に小物やバッグを片付けました。小物は集めるのも捨てるのも大変でした。ゴミが入っていたり、いるかいらないか分からない物がありました。鉛筆やペンが何十本も出てきて驚きました。いつもは使わないけれど持っておきたい物は全部「思い出ボックス」という箱を作って、そのしまうことにしました。ここまでの片付けだけで丸一日かかりました。

　このように取っておくと決めた後にそれらの置き場所を決めます。そして使った物は必ず元に戻すということを守れば部屋はずっときれいなままです。

　まず父に服の正しいたたみ方を教わってタンスにきれいにしまったり、よそ行きの服はクローゼットにかけたりしました。本の並べ方は工夫しました。よく読む本を上の段に、あまり読まない本を下にと決めました。「思い出ボックス」はクローゼットの中にしまいました。

　このように片付けたら見違えるほどきれいな部屋に大変身しました。全部終わるまで丸二日かかってしまったけど、そのかいはありました。この片付けは七月中旬にして、二ヶ月以上も経ちますが僕の部屋はきれいなままです。探しものに時間を使うこともなくなりました。これからもずっとこのすっきりした部屋で楽しく過ごしていきたいと思います。

1

レ工校がなくなる日

レ工校　初等部　四年一組

ふじ田　のぶたか

「三月からPS26が使えなくなる。二月は四週間、全部六時間じゅ業になる。」

と、お母さんが言いました。ぼくは、四月から四年生なのにどこで日本語を習えばいいのかな、と不安になりました。

　ほ習校がなくなったら、日本語の宿題もなくなります。毎日、ぼくはげん地校の宿題を終わらせてからほ習校の宿題をしています。英語の宿題が終わると、

「ああ、クラスの友達は今ごろ遊んでいるんだろうな。」

と、うらやましい気持ちになることもあります。ほ習校がないと、もっと自由になるけれど、日本語が上手にできるようにはなりません。

　お母さんは、まず、クイーンズの高校や中学校ではたらいている知り合いの先生に、土曜日だけ学校をしてもらえないかたずねました。けれども、土曜日は中国語の学校にかしていたり、いろいろな活動があったりして、いい返事はもらえませんでした。知り合いの先生は、かしてくれる学校がないか、あちこちに聞いてくれたそうです。

　次に、お母さんは、ぼくの通って

いるげん地校の校長先生に、土曜日に学校をかしてほしいという手紙を書きました。ぼくは手紙の英語をチェックして、「お母さん」といっしょに校長先生におねがいに行きました。

校長先生におねがいに行きました。

間もなくげん地校は、一週間の休みに入りました。

休みの間、お母さんは、ぼくが日本語で勉強を続けられる学校を調べていました。入れる学校が見つからなければ、お母さんは家でぼくに教えることを考えていたそうです。ぼくは、一年生のとき、家でお母さんが国語と算数を教えてくれたことも思い出しました。家で勉強するのはいいけれど、リラックスしすぎるし、

16×16

友達もいません。それで、ぼくは二年生から七工校に入ったのです。日本語で遊べる友達に会えて、うれしかったことを思い出しました。運動会や秋祭り、もちつき大会もないと思うと、悲しい気持ちになりました。

一週間の休みが終わって、げん地校の校長先生にことわられました。学校をかりるのは、本当にむずかしいことだと思いました。

その後すぐに、ベイサイド高校をかりられることになったと聞いて、ぼくは、

「七工校がなくならなくて、よかった。」

と、安べしました。

16×16

初めてベイサイド高校に行ったときは、教室のつくえやいすにがムがくっついていたり、落書きがあったりして、きたないことがいやでした。体育館もせまくて、早くPS26にもどりたいと思っていましたが、今は、友達といっしょに勉強が続けられることがいちばん幸せだと思います。

16×16

フルートの練習

ニューヨークW校4-4 関口怜花

みなさんは、土曜日と日曜日は好きですか？私は土日が大好きです。土曜日と日曜日は遊びほうだいで、お父さんがいるから私は土日が一週間の中で一番好きです。でもある日大きな問題が起きました。私は学校でフルートを習っていて、いつも練習するように言われています。それなのに私は土日に遊びすぎてしまい、フルートの練習を忘れてしまったのです。次の日の朝、私は起きた時に、フルートの練習をしなければいけないことを思いだしました。そして先生に何と言ったらいいか考えまし

16×16

た。でもそんなこと言ってどれだけおこられるか考えたら私はこわくなりました。そこで私はお母さんにどうすればいいか相談しました。やっぱりお母さんは、

「きちんとあやまりなさい。」と言いました。でも私は、そんなこと言う勇気はありません。そして、もうバス入が来る時間が来てしまいました。私はあわててリュックとフルートを持ってバス停に行きました。私はバス入の中でもフルートの事を考えていました。この時私はバス入のまどからスをわって外へ走って逃げたい気持ちでした。行き先がどこかわからなくても。ところがそんなこと考えて

とうとうフルートの授業の時間になってしまいました。天使か、悪魔か。悪魔か、天使か。私はそのことをずっと考えていました。そして私はフルートの教室に来てしまいました。もう逃げ場はありません。心ぞうがドクドクしています。

「どうしよう、どうしよう。」もう泣きたい気持ちでした。結局、私はフルートの先生にあやまりました。やっぱり勝ったのは天使でした。でも先生は、

「練習をしないならフルートを返しちゃいなさい！」と言いました。私はもうなみだがあふれそうでした。私はそれをこらえながらフルートの

て逃げている場合ではありません。もうバス入は学校に着いてしまったのです。この時私はもう死にたい気持ちでした。この気持ちのまま教室に行って、授業が始まりました。でもフルートの事を考えている私には、先生の話なんか全く聞いていません。その時の私の心の中には天使と悪魔がいました。天使は、

「あやまった方がいいでしょ。自分がやってしまった事なんだから。」

悪魔は、

「そんな事ごまかしたらいいじゃん。だって言わなかったらだれも気付かないじゃん。」

どちらにしようか迷っていると、

授業をしました。授業が終わった時には私なんかどうなってもいいと思っていました。同時にあやまることができてすっきりした思いともうそんなことはしないと反省した気持ちがまざっていました。帰ってお母さんに今日の事を伝えたら、

「あやまることができてえらかったね。これからもうしなければいいんだよ。」とやさしい言葉をかけてくれました。私はとても温かいぬくもりを感じました。みなさんもこのように、天使が悪魔で迷ったらきちんとあやまることのできる天使になりましょう。

私と読書マラソン

W校　四年三組

是永真凜

「一位は三千六百十三分の是永真凜さんです。」先生が言ったとたん、私の心はわっとびっくりしました。

一位なんだ、二回目だ。幼児部から三年生までずっと入賞していたけれど、その中で一位になったのは一年生の時だけでした。その時は二千三百五十三分読みました。去年、三年生で一位だった子は、六千分をこえていて、二位の子でも五千分くらいだったので、「あぁ、今年はがんばったのに、一位をとりたかったけど無理だろうな～」と私は思っていました。

三日目はほとんど読まなくなって、補習校の宿題の方が大変だったので、四日ほど何も本を読んでいませんでした。でも、お母さんに、「読書マラソンはどうしたの？」と聞かれて、ああっわすれてた、どうしようと、かなりあせりました。

私は、「別に読書マラソンは大切じゃない」と思う時もありました。「三年生は千三百五十分で六位だから、千三百五十一分でも六位までには入るだろう」など考えてたりもしました。それでも読書マラソンをやるからには、「やっぱり一位を取りたい。」と言う気持ちが強くて、家にある本をかたっぱしから読みました。

今まで一度も手に取ったことのない本も読んでみたり、そんなにおもしろくなさそうでも読みました。なぜかと言うと、読んでみると楽しくなって、読んでいるうちにその本と友達になれるからです。こうして私はどんどん本を読んでいきました。でも、あっという間に時間がすぎてしまうので、とうとう最後の日になってしまいました。これまでなかなか一位を取れなかったのは、休み中に気持ちがゆるんでしまって、ついうっかりしてしまったからだと思います。

今年のようにがんばって、私は五年生も六年生も一位を取ってみたいです。

この三年間で分かったこと

ニューヨークほ習授業校W校

四年二組　竹田　桃子

忘れもしない、今から三年ほど前の二〇一二年四月五日、夜八時ごろ電話が鳴った。

「えー、うそー！」

キッチンから母の声が聞こえてきた。母の顔が引きつっている。私は何が起きたか分からなかった。電話を切った母は一言、

「ニューヨークに行く事になった」

と兄と私に言った。私はゆめだと思った。だってこの日、私は小学校の入学式を終えたばかりだったから。みるみるうちに、なみだがこぼれてきた。やっとランドセルが使えたと思ったら、使えなくなる事が決まってしまった。

「ニューヨークってどこにあるんだろう」。

私は不安になった。

日本を出発する日が決まった。たんにんの先生にも友達にも言えないまま、ニューヨークに引っこす準びが始まった。

まず、家の近所の英会話教室に通うことになった。そこでは、最初にアルファベットを覚えたり、曜日や月の読み方を習った。初めて習う英語はとても楽しくて、わくわくした。でも先生には、全く日本語は通じなかった。

かった。

ニューヨークに行く日が近付いてきた。最後の運動会、最後の給食、最後のプール。何もかもに「最後」という言葉が付いていった。

いよいよ学校最後の日が来てしまった。みんなは、次の日から夏休みでうれしそうだったけど、私はそんな気分にはなれなかった。クラスのお帰りの会で、先生によばれてみんなの前でお別れのあいさつをした。泣きそうになったけど、ちゃんと最後まで言えた。みんなからは、私のために折ってくれたいろんな形をした折り紙をもらった。先生からは、クラスの集合写真をもらった。私は、

みんなのことをわすれないように、一人一人写真に名前を書いた。

七月二十七日、母と兄と、たくさんの荷物といっしょに先にニューヨークに来ていた父の所に引っこして来た。思ったよりいなかでびっくりした。りすはあちこちピョンピョンはねているし、夜になると、うら庭ではカエルの鳴き声なのか、楽器のギロみたいに聞こえてきた。まるでえんそう会をしているようだった。

「ようこそ」。

と言ってくれているようにも思えた。

九月に入り、地元の小学校に入るためのスクリーニングテストを受けた。一人ずつ教室によばれて、名前

と年を聞かれた。もちろん英語で。母がテストで話のきっかけになるように、私のお気に入りのてんとう虫のポシェットを持たせてくれた。予想通り、このポシェットのことを聞かれた。家で練習していた通り、うまくいった。

こうしてこの二日後から、地元の公立の小学校に一年生として通えることになった。

いよいよ現地校初日、私はドキドキしながらかた手には、文ぼう具が入った大きなふくろを持って、スクールバスに乗り込んだ。

「うわー、アメリカ人がいっぱいいる！」。

「この授業が早く終わりますように。」と一日中、心の中でいのっていた。

学校に行き始めて二、三日目の朝信じられない事があった。その日の朝、学校のロッカーに荷物を置こうとしたら、クラスの子に、

「私がサインを出したら動いていいよ」。

と言われた。私は、

「え？」。

と思った。たよる人は他にいないから、その子の言う事を聞くしかない。私はその子の合図が出ないと、自分が動きたくても何も動けなくなってしまった。始めはふざけているのかと思ったけど、どうやら本気だった

クラスルームに行っても、どこに行っても、当たり前だけどアメリカ人だらけ、英語ばっかり聞こえてきた。クラスには、私の他に三人日本人がいた。初日は、みんなやさしくしてくれた。

授業が始まった。なんて言っているのかさっぱり分からなかった。文字が見えているのに読めない、聞こえてくるのに、何も分からない、自分が伝えたいことも言えない。私はまるで、ヘレンケラーみたいだと思った。ヘレンケラーは、もっと大変だったんだろうけれど。私は、母が作ってくれた英語の一言カードをにぎりしめながら、

ようだ。私はだれにも言わないで、がまんし続けた。

二週間ぐらいたったある日、学校から帰って手をあらっていると、目からなみだがこぼれてきて、そのままなかにすわりこんでしまった。そんな私のことを見ていた母が、

「どうしたの!?」。

とびっくりして私の顔をのぞきこんだ。私は初めて学校での事を母に言った。なみだが止まらなくなってしまった。母は、

「なんでも」と早く言わなかったのか？」。

とめずらしくまじめに言った。

「英語がしゃべれたら、こんな思い

をしなくてすむのになぁ。」

私はくやしかった。

この日から、英語の特訓が始まった。みんなが学校から帰って遊んでいる時も、私は家で勉強していた。学校では、英語が分からなくて落ちこむことが多かったけれど、習っているバイオリンではすくわれた。練習すれば丸がもらえて、先生にもほめてもらえてうれしかった。母が、

「なんでもがんばっていれば、いつかできるようになる。変わらない努力を毎日続けることが大事だよ。」

何度も何度も私に言った。

ニューヨークに来て三年ちょっとになる今では、英語も話せるように

かみのみそしる

L一校 三年二組

マ笑里

「ママ、かみさまはみそ汁じゃないよ。」

妹はそう言った。窓の外を見ていた私は、はっとした。

車の中で、おととし結こんした日本のおじさんとおばさんに、赤ちゃんがいつ出来るか話をしていた時、母が、

「神のみぞ知る。」

と、言った。妹の言葉を聞いて、母は一しゅんだまった。

「は？何言ってんの？」

妹は、

なってとても楽になった。泣いていたことがうそみたいだ。アメリカ人の友達もたくさんできて、毎日とても楽しい。始めはいやな思いもしたけど、その分、周りの友達の気持ちも分かる。

三年前の自分に言ってあげたい、

「がんばったらいいことがあるよ。」

これからいろんなことがあると思うけど、今まで感じたくやしかったこと、そしてどうしたらかい決できるかを考えて、へこたれずに乗りこえていきたいと思う。

「がんばれ、自分！」。

「かみって紙のかみ？それともかみの毛のかみ？かみのみそ汁って何だよ。」

と、聞いた。しばらくして、とつぜん母が大笑いし出した。私も妹もきょとんとしてしまった。

「何でこんなに大笑いをしているんだろう？」

私はそう思った。

「赤ちゃんが出来るかどうかは、神様だけが知っているという意味だよ。」

母が言った。

「あっ、そういう事か。」

私はなっとくした。そして、三人で大笑いをした。

その日の夜、フェイスタイムの時日本のおばあちゃんにその事を教え

た。おばあちゃんは画面の向こうで大笑いし出した。何回も何回も笑った。私たちもいっしょにまた大笑いした。

私はふと、昔読んだ「きものをぬげ」を思い出した。おじさんが「ここではきものをぬげ」というかん板を読みまちがえて、はだかになってしまった笑い話だ。本当は「ここで、はきものをぬげ」なのに、「ここでは、きものをぬげ」と、読みまちがえた。点のいちがうだけで文章の意味がかわる。だから、句読点は大事だ。

「かみのみぞ、しる」と、「かみの、みそしる」点のいちがかわると、意味もかわる。日本語っておもしろいな。

サイダープレスの日

三年一組　ブシェ　音里

サイダーは、りんごをすりつぶしたジュースのことです。ニューヨーク州やロングアイランドでは、昔から人々の間でサイダー作りがさかんでしたが、今は自分の家で作る人はほとんどいません。

ぼくの家では、ひいおじいちゃんからうけついでいるサイダープレスの古い機械を使い、毎年友達や、カブスカウトのグループやその家族を集めて、サイダーをまる一日作ります。今年もサイダープレスの季節がやってきました。

サイダー作りの方法。

はじめに、りんご畑のおじさんからりんごをハットブッシェル買い、トレーラーで、りんごを家に持って帰ります。トラクターを使って、りんごとプレスを裏庭に運んで組み立てます。次の日はスカウトの全員とその家族や友達といっしょに、一日じゅうサイダーを作ります。

次に、「プレス(機械)」についてです。プレスは木でできています。百年以上たつ古い機械です。その使い方は、はじめ、りんごをスクラッターへ。りんごをすりつぶす所しに入れます。りんごのくずを、たるのふたがないのに入れます。そのたるが

いっぱいになったら、からっぽのたると取り替え、大きいねじを回すとすりつぶしたりんごがたるの中で円い板におされ、下のたるにサイダーが流れてきてたまります。

そのたるには蛇口がついていて、そこからサイダーをびんにつめたり、コップに注いで飲んだりします。

このように、サイダーを作るのには、大体四つのステージがあります。

一番はりんごをあらう所、二番はりんごをつぶしてこなごなにする所、三番めは、サイダーをしぼる所、そしてさいごにサイダーをびんにつめてふたをする所です。

サイダープレスの日に、もう一つぼくが楽しみにしている事は、みんなを乗せてトラクターを運転する事です。ぼくはいつもお父さんといっしょに畑でお手伝いをするので、トラクターの運転が得意です。小さい子や大きい子を五、六人乗せて川辺や池の周りを走れば大よろこび！

サイダー作りでは、ぼくはグライソダーが一番大好きです。理由は、クランクを使うのがおもしろいからです。クランクを使うとぜんぜんつかれません。だからずうっと回し続けて、たくさんサイダーが作れますでも、みんながやりたいので、順番に交たいでします。作っている時、好きなだけ飲めます。コップがない人も、りんごをナイフでほって、コップを作ったりして楽しいです。

今年のサイダープレスは十月十八日にやります。すっごく楽しみです。

おわり

16×16

16×16

寒かったラフティング

NYほ習授業校W校 三年一組

高橋 侑大

夏休みに、ワイオミングのジャクソンホールで、家族とラフティング（急流下り）をしました。一番流れの速いコースに行きました。

まず、水着に着がえて、バスに乗って町から遠い川へ行きました。ライフジャケットを着て、船を冷たい川まで引っぱって行きました。男の人達は、船の外がわにすわってオールをこぎ、女の人や小学生のぼく一人だけ、真ん中にすわりました。はじめは、前から二列目にすわっていたけれど、前のお姉さんによばれて、

16×16

一番前の列に、うつりました。ギャビンという船頭さんは、船の一番後ろにすわって、

「はい、こいで。」

「はい、右の人だけこいで。」

「はい、こぐのをやめて。」

などと言いながら、ルールや自然の事、この川で起こった事などを説明してくれました。

さい初の波が来た時には、「すごい冷たい、気持ちがいいな。」と思いました。岩の周りには、うずがまいていました。川を下って行くと、流れがどんどん速くなってきました。

次に、前の方に波が見えた時、小さい波がどんどん大きくなってきて、つえいしていました。ざんねんながら、その写真を見る事は出来なかったけれど、ぼくの心に残っています。

真は今、この作文を書いている時でも、まだはっきり見えます。

さい初船に乗った時、みんな知らない人達だったけれど、終わった時には、初めから仲間だったように仲良くなっていました。さい後にみんな船からおりて、陸に上がりました。みんなびしょぬれでした。上の道路の所までペンギンみたいにヨチヨチ歩きで行きました。何もない小屋で着がえて、バスに乗りました。他のみんなは、元気でしたが、ぼく達家族だけは、すごく寒くてふるえていました。ぼくの歯はドラムみたいにカタカタカタカタなっていました。

その後、別の場所にうつって、さらに寒くなった外で、夕ごはんのバーベキューを食べました。ふるえが止まらなくて、早くバスの中に入りたいと思っていました。

ラフティングをやりたくなかったぼくのお母さんは、一番びしょぬれになってふるえていたけれど、

「楽しかったね。」

と言いました。

「やってよかったでしょう。」

と、ぼく達は言いました。

水てきがその波の周りにはねていました。実さいに船がうずに入って行って、波が船全体にかかりました。

その時、船のみんなのさけび声や、ざっぱあんと水の音も聞こえました。

通りすぎて後ろを見たら、船のみんなは、びっしょりぬれていました。でも、みんな笑って楽しそうでした。

ぼくも体全体プールに入ったみたいにぬれて、ワクワクしていました。

空には、イーグルやオスプレイ、木の上には、その巣が見えました。

川を下って行ったので、さい初近かった道路がすごい高い所に見えました。

プロのカメラマンが、ぼく達をさ

大地忍者、さん上

L工校　二年一組

あべ　大地

くろづくめの忍者が、ぼくの目の前にあらわれました。さし出されたくろいはちまきを、きゅっとしめると、ワクワクしてきました。くろ忍者はぼくを「大地忍者」とよびました。

それは、二〇一五年八月七日のことでした。ぼくは東京あさ草の「忍者道場」に入門しました。

そこでくろ忍者に教わったのは、四つのじゅつでした。その一、けんさばき。その二、しのび足。その三、くもがくれ。その四、手りけん。どれもたのしかったけれど、中でも一ばんおもしろかったのは手りけんでした。

本ものの手りけんをもったのも、それをなげたのも、はじめてでした。手りけんは星の形をしていて、さわるとかたく、ひんやりしました。手にとると、ずっしりとおもたかったので、むかしの、本ものの忍者はふだんこまいの手りけんしかもち歩いていなかったと聞いて、なっとくしました。

ぼくがなげた手りけんは、全ぶまとにささったので、くろ忍者はびっくりしていました。

ぼくには「忍者のそしつがあると言い、くろ忍者はぼくがアメリカに帰ることをざんねんがっていました。

しゅぎょうをつんで、つよい忍者になることをそうぞうすると、とてもたのしい気分になります。たとえば「大地忍者、さん上！」と、あらわれるところです。

にわとり

NY　W校　二年四組

エルブリッジ　里砂

わたしの家では、今年の春に、メスのひよこを六わかいはじめました。お店でえらんだひよこは、どれもろわろわでした。手の上にのるくらいの大きさでした。ひよこはさむさによわいので、車のヒーターをぜんかいにして帰って来ました。

わたしは、あつくてあせびっしょりになって、てのをおぼえています。

ひよこが大きくなるまで、はこに入れて家の中でそだてました。家ぞくみんなで、毎日おせわをしました。ひよこたちは、だんだん大きくなりました。

五月になって外があたたかくなったころ、にわとり小やを買いました。その日ぜんぶメスだと思ってかっていたにわとりのうちの一わが、オスだったのです。

わたしたちは、とてもびっくりしました。おん鳥は、なき声がうるさくなるので、にわとりを買ったお店で、めん鳥ととりかえてもらうことになりました。かわりに来ためん鳥は、人によくなつく、かわいいにわとりでした。

12×12

から、にわとりたちを小やにうつしました。朝日が出るころ、鳥小やをあけます。にわとりたちは、日がしずむまで一日、小やの外です。ごします。地めんをほってみみずを食べたり、すな場ですなあびをしたりするのが大すきです。

六月になると、六わのうちの一わに、大きくて赤いトサカができました。

12×12

八月になって、にわとりたちが、たまごを生みはじめました。家で生まれたたまごと、ストアで買ったたまごでスクランブルエッグを作って、食べくらべてみました。家のたまごは、あまりあじがしました。買ったたまごは、少ししょっぱいあじでした。

わたしは、うちのかわいいにわとりが、大すきです。

12×12

ぼくとおばあちゃまのスタンプラリー

W校　二年四組

那須　藍貴

夏休みのとても暑いある日、ぼくとおばあちゃまは、東急線のスタンプラリーをしました。ぼくが今年のスタンプラリーにすごく行きたかったのを知っていたおばあちゃまは、「いっしょに行こう。」

12×12

と先に用紙をもらって来てくれたのです。ぼくとおばあちゃまは、いろんな線の十八駅全部周れる予定を一週間前に細かく立てました。

その朝ぼくはまち切れなくて、上り坂を走りました。おばあちゃまもおいつこうと必死に走っていました。

ぼくたちは鷺沼駅から午前十時にスタートしました。

スタンプラリーは二駅一グループで両駅に行くと、かたい昔の切符がもらえます。スタンプは改札口の外にあるので、スタンプをおしてまた電車にのるには時間がかかります。だから、ぼくとおばあちゃまは、たくさんのかいだんやエスカレーターをなるべく速く走りました。でも急いでいて、ぼくはスタンプを反対におしてしまったりしました。

12×12

ぼくとおばあちゃまは、かたい切符をはじめてもらった時、すごくうれしくて、
「やったあ。」
と二人で万ざいをしました。
お昼にベソチで食べた大好物のミニメンチカツバーガーは、がんばっていたぼくたちにはいつもよりもっとおいしくかんじられました。
ぼくとおばあちゃまは渋谷で五時をすぎていたので、

はじめての一位

阿知波 颯

土曜日にぼくにとって三回目のうんどう会でした。
今年もぼくは赤組でさんかしました。今までとちがって二年生は玉入れやお子きょうそうがなく、ぜんぶ自分たちできょうぎしました。二年生はかっぱりおにいさんなんだと思い、がんばろうとますますやる気が

「ゴール出来るかな。」
と心ぱいしました。でも、ゴール出来たので、二人でまた万ざいをしました。ぼくたちは、お祝いにすごく冷たいアイスを食べました。
ぼくたちのスタンプラリーの一日は、あっと言う間にすぎました。ぼくは本当に楽しかったけれど、七十五才のおばあちゃまは、きっとつかれたでしょう。

出ました。
もう一つがんばりたかったのは、ときょうそうでした。はじめてはしったときょ年は上手くはしれなくて、三位でした。とてもくやしくて、来年こそ一位をとりたいと思いました。二年生になってクラスのリレーのせんしゅのほけつになりました。夏休み明けから毎週リレーのれんしゅうにさん

かして、はしるとっくんをしていました。けっきょくリレーには出ることができず、すこしかなしかったです。でもパパにてのくやしい気もちをときょうそうにむけて、一生けんめいはしってごらん。と言われて、その通りだなと思い一生けんめいはしることにしました。

12×12

本当なだと思いました。

その後パパもつなひきに出て赤組がかち、さい後赤組がゆうしょうしました。ぼくは三年れんぞくでゆうしょうできて、さいこうでした。うんどう会は大すきです。

12×12

とうじつぼくのばんが近づくとドキドキしました。ホーンの音とともに、ぼくはゴールのテープだけを見て一生けんめいにはしりました。とちゅうでぼうしがとれてしまったけれど、ぼくは気にせず前へはしりました。さいごーばんでテープをきった時、めちがくちうれしかったです。一位のシールをはってもらって

12×12

たこたべられるよ

1年1くみ

ほさか あい子

よっしいは、わたしのともだちです。もともとは、わたしのおかあさんのともだちでした。でも、いまはりょうほうのともだちです。それは、よっしいがやさしいからです。

今日は、たこやきパーテ

12×12

ーです。わたしは、たこは、にがてでした。そのわけは、なっとうみたいにねばねばしているからです。だから、わたしはいつもたこのかわりににくを入れます。それは、にくやきとよんでいます。でも、たこやきなのでたこもようういしました。

はじめに、たまご、水、たこやきのこな、きぎんだと、いいました。きじがとろとろになり、ホットケーキみたいにおいしそうでした。にくとたこをたこやききに入れました。シューという音がきこえました。おいしいにくのにおいがプーンときました。

わたしは、たこはたべたくありませんでした。けれども、よっしいが、「がんばあれがんばあれ。」

キャベツを入れました。よっしいがまぜてくれました。よっしいは、「はやくまぜるといいよ。」と、いいました。パテシエみたいでした。わたしも、やってみましたが手がいたくてできませんでした。よっしいはりょうりが上手だとおもいました。

「きじがとろとろになるほうがいいよ。」と、おうえんしたので、しかたがありません。わたしは、ソースをたっぷりつけてぱくりたべちゃいました。はごたえがあってにくみたいでした。おいしかったです。

はじめてのあじでした。わたしは、たこが大すきになりました。ぜんぶよっしいのおかげです。ありがとうよっしい。

バースデーパーティー

W校一ねんニくみ　こうや　ゆうた

ファンフォーキッズでバースデーパーティーをしました。かぞくとともだちとレっしょにいきました。

いろいろなアーケードゲームをしました。

つぎにレーザータグをしました。レーザータグとは、レーザーのでるじゅうであ

けました。

いっしょうけんめいやったのであせをかきました。

つぎにパーティールームにいってピザをたべて、フルーツパンチをのみました。

ぼくのすきなものだったのでおいしかったです。

そしてケーキをたべました。ミニオンズのケーキでした。ケーキをもってきたときにでんきがきえたので

いてのベストをうってたたかいます。

ニチームにわかれてたたかいました。十四人だったので七人ずつにわかれました。ウィーンウィーンのサイレンのおとでゲームがはじまると、てきをねらってこうげきしました。

ぼくはかげにかくれながらねらってました。ぜんねんながらぼくのチームはま

びっくりしました。

するとろうそくに火がついたケーキがはこばれてきました。

みんながハッピーバースデーのうたをうたってくれました。ぼくはとてもうれしかったです。

たくさんのともだちやかぞくにいわってもらいとてもハッピーでした。

おとうとが大すき

Wこう一ねん三くみ

かまた　たいしん

ぼくはおとうとがかわいいです。小さくてやわらかくていいにおいがします。ときどきいじわるになってけんかをするけれど、きらいにはなりません。かぞくだからです。

ぼくがかなしいときにはなぐさめてくれたり、みかたになってくれて、おにいさんのようなときもあります。

しょうらいは、ふたりでうちゅうのしごとをしたいです。ぼくが□ケットづくりで、おとうとがうちゅうひこうしになります。ふたりともがんばります。

12×12

わたしのいもうと

青木　ななみ

わたしには、いもうとが二人います。小さいいもうとは0さいで、名まえはゆいちゃんです。かおは、わたしの小さいときにていますわたしは、それがとてもうれしいです。ゆいちゃんは、いたずらをします。わたしのひきだしをあけたり、くつばこのくつをぜんぶだしたり、ティッシュペーパーをだしたりします。それをかたずけるのは、いつもわたしのしごとです。ほんとうは、すごくめんどくさいです。それから、ゆいちゃんはくいしんぼうです。ごはんはなんでもたべるし、のこしません。すきなたべものは、りんごとさつまいもです。0さいなのに、りんごをまるごとかじ

12×12

わたしといもうと
W校一年五くみ
横式 美玲

わたしのいもうとの名まえはみなみといって四さいです。わたしはいもうととなかよしです。いつもひまなときにはおかあさんごっこをします。いつもおふろに一じかんはいります。ねこちゃんごっこをしているからです。

ります。わたしが0さいのときは、りんごをすってたべました。さいきん、ゆいちゃんはまをパチパチできるようになりました。わたしがなんかいもおしえたから、できるようになりました。わたしは、ゆいちゃんのおせわをするのがすきです。ゆいちゃんが、大きくなるのがたのしみです。

いもうとはでもわるいこです。ママのいったことをいもうとはききません。ママが
「おかたづけしなさい」。
というと、みなみがしない
でけっきょくわたしがいつ
もやっています。わたしがべんきょうをしているときもみなみが
「あそぼう」。
といってわたしが

「いまはべんきょうしてるからあとであそぼうね」。
というとすわりこんですねてしまいます。でもママが
「ご本をよんであげるよ」。
とか
「テレビをみよう」。
というとみなみがママのところへいって一しょにテレビを見たり本をママがよんであげたりします。
けんかをするときもありま

す。わたしがなにかで一人であそんでいると、みなみがそのおもちゃをとって、わたしがみなみをたたくと、やりかえしてわたしのことをみなみがけったりしてママにおこられます。さいごは

「ごめんね。

といってなかおりします。

このようにあそんだりけんかをしたり、たのしくして

たいけんにゅうがく

W校一年五くみ

ウォーカールークかずき

なつやすみ、日本の学校で、一年一くみにはいった。どきどきしたけど、ともだちがたくさんできた。やすみじかん、あそびたかったのに、はしりがはやい子につかまって、アメリカのことをきいてきて、チャイムがなった。

います。

そうじのじかん。せんせいが、「すきなところにいっていいよ。」といって、ぼくはクラスの中をそうじした。だれかが、そとでくさとりをしているのを見て、ぼくもやったらたのしくて、まいにち、くさとりした。

プールのじかん。一ばんきらいだったのは、さいてよにシャワーでぬらすこと。いたくて、おわると、かせ

がふいてさむい。いつもプールの水がつめたかったけど、一かいだけあたたかい日があった。よるになるまで、ずっとあそびたかった。

きゅうしょくのじかん。カレーのにおいがして、すごくうれしくて、たべるのがまてなかった。おいしくて、またでたらいいなあとおもったけど、一かいしかでなかった。すきじゃない

12×12

おいときたかったけど、バシャンってこわした。ともだちが「いっぱいつくっていうから、「どこにおいたの？」ってきいたら、「くつばこのおく。」って、見せてくれた。ぼくは、しらなかったから、「え？」ってなって、じぶんに、プンプンおこった。

また、日本にいきたいなあ。

12×12

ミルクがあったけど、がんばってのんだら、おいしかった。日本のミルクは、アメリカのよりおいしい。

雨がふった日。やんでそとにでたら、大きいあなに水たまりができて、ブーツでパチャパチャやって、おもしろかった。すながべタベタドロドロになって、すごい大きいどろだんごができて、うれしかった。

12×12

たんじょうびかい

一ねん五くみ

山下　澄花

十月九日は、わたしのたんじょうびです。パパとママがおたんじょうかいをひらいてくれました。わたしのしんゆうのアンバーなどのおともだちがたくさんきてくれました。びよういんでみんなイアスタイルをやってもらいました。

12×12

わたしは、バースデーがールなので一ばんはじめにアスタイルをやってもらいました。わたしはムービースターというかみがたにしてもらいました。それは、かみのけで上のほうにおだんごをつくり、下のほうのかみのけをすこしたらすがみがたでした。ヘアスタイルをやってもらっているあいだ、わたしはドキドキわ

12×12

プとドレスアップをしました。さあ、ファッションショーのはじまりです。赤いじゅうたんの上を、スターのようにあるきました。わたしは、すこしはずかしかったです。

それから、ケーキがようにされて、みんながハッピーバースデーのうたをうたってくれました。わたしはロウソクの火をふきけしま

12×12

くわくして、どうなるのかなあ、とおもいました。それに、こんなすてきなかみがたにしてくれるなんて、

ヘアスタイリストさんをすごいとおもいました。かがみの中のじぶんが、とてもきれいに見えました。そして、わたしのおともだちも、つぎつぎにすてきなかみがたにしてもらいました。

つぎに、みんなメイクア

12×12

した。とてもしあわせなきもちになりました。

とてもたのしくて、みんながしあわせなきもちになれるたんじょうかいでした。

12×12

バタバタバタ

2年　梅澤　花

ピピピピー、あたまの中にすんでいる私の2ひきの青虫ちゃんがまたどんどん下りてきておなかの中まできちゃった。

「青どくはっぴょうがはじまるよ。」

と先生が言ったから。ドキドキ、ほんとにドキドキする。おなかがいたくなった。

「前に出てください。」

と先生言ったらちょうちょうちょさんがうまれた。みんなのかおを見たら、ちょうちょさんがゆっくり羽をうごかしはじめた。おねがいだからしずかにしてて。

あ！音どくまちがえちゃった。つっかかっちゃった。

ちょうちょさんの羽がバタバタ、ものすごくはやくなってとまってくれない。

おなかがきれちゃいそう。

「はい、よくできました。」

バタバタバタ。

「上手だったよ。」

ちょさんがポンシときえた。

と先生が言った時、ちょうちょのしあわせバルーンがおなかの中にプクッとできた。

とマミーがにっこり言った時、ピンクのしあわせバルーンがおなかの中にプクッとできた。

「大きな声でがんばったね。」

と先生が言ったとき、むらさきのしあわせバルーンもぷくっとできた。わたしのおなかの中のバルーンにはスマイルマークがついている。元気になった。ほんとうにハッピー。

漢字

2年2組　前部　翔之進

ぼくの好きな物は、漢字です。これからその理由を説明します。

一つ目は、漢字がべんりだからです。漢字は色んな事に使われています。文字や名前、文章にも使われています。漢字は文字や名前、文章を短くするから好きなのです。

二つめは、形と書き方です。漢字には色々な形があります。その形は、「部首」と言う物から作られています。部首は漢字の元です。部首には色んな形があります。糸へん、さんづくり、玉など色々な部首があります。

また、漢字には色んな書き順があります。書き順は

とても大切です。でも左きのぼくは書くのが大変です。漢字は小学生から高校生まで習います。漢字辞書を見ると、色んな書き順がありまず。ちなみにぼくの漢字辞書には、中学生までの漢字がのっています。画数は最高二十画をこえます。一番短い画数の漢字は、「一」と言う字です。一番多い画数の漢字は、「鬱」と言う漢字です。画数は二十九画です。お兄ちゃんが、「これが一番画数の多い漢字だよ。」と教えてくれました。ぼくは、「漢字ってこんなにあるっておもしろいな。」と思いました。

三つ目は、漢字辞書です。ぼくは漢字辞書を色んな事に使っています。ぼくは、漢字辞書を高学校にもって行

きます。漢字の時間に漢字辞書を使う時は、まず漢字の部首をさがします。それからその部首のページに行き、漢字を見つけます。

よく調べるのは、漢字のなりたち、人名と、元の字です。まず、なりたちは漢字の形です。漢字は、絵、漢字と漢字のごうせいからつくられています。

人名用漢字は、人の名前に使われている漢字です。ぼくの名前の翔之進の翔は、人名用漢字です。之の字も人名用漢字です。

そして元の字ですが、たとえば漢字の「漢」の古い字は「漢」です。

ぼくは、漢字辞書のおかげでこの事を知る事ができました。ぼくは、お母さんにもこの事を教えてあげました。

12×12

ぼくが、まだ習っていない漢字を書こうとすると、お母さんは、

「やめとまなさい。」

と言いますが、ぼくは使いたいと思います。お母さんはそれについてもおどろきます。

漢字辞書も漢字も全部べんりです。

漢字辞書をもっている皆さん、ぜひ使って下さい。

12×12

グランドキャニオン

W校二年五組

中じま はると

ぼくは、弟とお母さんとお父さんとおじいちゃんとおばちゃんと、ひこうきにのってグランドキャニオンに行きました。車にのっていろいろなところに行ったけど、ぼくが一ばんかんどうしたところはグランドキャニオンです。なぜなら、

12×12

グランドキャニオンの谷が思っていたより広くて、ふかかったからです。がけの下を見たかったから、ぼくは、お父さんといっしょにがけの先までおりました。さいしょはちょっとこわいと思っていたけど、おりてみたらぜんぜんこわくなかったし、上から見るよりきれいでした。もっと先まで行きたかったけど、お母さんがおちたらあぶないからだめだよ、と言ったので、ぼくはあきらめました。

グランドキャニオンでは、日の出と日の入りも見ました。ぼくは、日の出のほうがすきでした。日の出を見るためにお父さんが早くおこしたけど、まだねむかったし、外はまっくらでした。がけとがけの間から太ようが上がってきて、まわりが

明るくなってきました。まぶしかったけど、きれいでした。

グランドキャニオンは、ナショナルパークで自ぜんがいっぱいあり、しかにも出会ったし、とかげも見つけました。一回目はカモフラージュしていて、見つけるのがむずかしかったです。グランドキャニオンのしんをいっぱいとりました。

しかやとかげもとりました。とった理ゆうは、きれいだったし、思いでにのこすためです。またきたいです。

とくべつなポスト

ほ習校三年一組

ふじ本　れい花

わたしは、いつも学校から帰るとポストをのぞきます。のぞく時、とてもドキドキします。わたしへの手紙がポストに入っているかな？そう思うからです。

さいしょの方は、ママが手紙をわたしてくれていました。けれど、それよりも自分で見つけた方がうれしいと気がついたので自分で、ママからポストのかぎをかしてもらって開けるようになりました。日本にいたころは、手紙を書こうなんてちょっとも思いませんでした。たった手紙

い間お返事が来ないととてもかなしくなります。それは、わたしのことをわすれてしまったのではないか。と思うからです。

そんな時、うれしい事はおばあちゃんからの手紙です。おばあちゃんからの手紙は、わたしをかなしい事から立ちなおらせてくれます。おばあちゃんは、絵はがきを使っていて文がわかりやすいし、つくこころのきもちにあわせて文を書いてくれているからです。

このごろは、お手紙を書いても、お返事がありません。なのでそんなにお手紙を書くことも少なくなりました。けれど、おばあちゃんは前と

のことだけで、こんなにかわるとはぜんぜんよそうしていませんでした。

半年前四月十日、わたしがアメリカに来たころはお友だちにたくさん手紙を書いていました。アメリカに来た日にとまったホテルでも書いていました。アメリカから日本まで手紙がとどくのは、とても長い時間がかかるので書いてもすぐには、お返事が返って来ません。でした。けれどもうわすれたころにお返事が来るので、びっくりしたりうれしくなります。なぜうれしいかというとお返事を書く元気が出てくるからです。手紙もお返事が来るとすぐにお返事を書いていました。けれど、とても長

かわらずお返事を書いていてくれます。

わたしは、今から少しづつ手紙を書く回数を一回から二回のようにふやしていきたいです。それは、そうするとまたアメリカに来てすぐの時のようにお返事がたくさん来ると思うからです。だからわたしにとってわたしの家のポストは、とてべつなポストなのです。

一年たって楽しいほ習校！

ニューヨークほ習校三年三組

河合　泰吾

ぼくは、ほ習校に通ってから一年たちました。ほ習校の楽しい所やよい所が分かりました。

まず、先生のことを書きます。先生のよい所はいつもにっこりわらって教えてくれる所です。ぼくが休み時間に先生の所に行っていろいろな話をすると、わらってくれます。ぼくはわらってくれる人が好きです。だから先生もいつもわらってくれるので好きです。また教頭先生ややなぎさわ先生はいつも大きな声で、「おはようございます。」

らわれます。図書館では本がきちんとせい理してあるのでさがしやすいです。まん画は一さつしかかりられずかなしいけれどいろいろな本をかりたいと思います。

ぼくは、このようなほ習校はとてもよいと思います。だからこれからもっとよくするために、ぼくも大きな声で

「おはようございます。」

とあいさつしたり、しずかにじゅぎょうを聞いたりしたいと思います。

と言ってくれます。ぼくは、それをみて元気だな、いいなと思います。

次にクラスのことを書きます。ぼくのクラスの楽しい所は、男の子と女の子みんなでおにごっこをする所です。みんなでおにごっこをするとおにになるのがむずかしくなるけれど楽しいです。また、クラスのよい所は、しずかでやさしい所です。クラスがしずかだと集中できて早くべん強が終わります。みんながやさしいと学校に行きたくなります。ぼくはこのようなクラスをもっともっとよいクラスにしていきたいです。

三つ目は本のことです。ほ習校には図書館があり毎週二さつまでかり

母のいない十日間

W校　四年二組

ウォーカー　美咲

「おじいちゃんが、たおれた！」

春休み、家族でドバイに行った時、おばさんから母に、「イーパ（おじいちゃん）が入院した」と、電話がかかって来た。「エCU」という所に、入っているらしい。「夏休み、日本のおうちに、イーパいないの？」心配になった。

旅行から帰って三日後、母が一人で日本に行く事になった。「学校にどうやって行くんだろう。宿題はどうしよう。ご飯はどうなるんだろう。ママが全部決めてるのに、ママとは

なれた事なんて無いのに、いつもとちがう生活になっちゃう…。」急に、不安になった。

弟は、日数の意味が分からないので、母は「10回ねたら、帰って来るからね。」と、言った。毎ばん「おやすみなさい。」毎朝「おはよう。」と、ベッドに来て言ってくれる母が、いない。夜、弟が泣いた。私も泣いた。

その週末、私と弟は、補習校の四年生と一年生になった。うれしいけど、友達と話したいけど、母がいない事で頭がいっぱいで、さびしくてだまってた。友達に「美咲ちゃん、どうしたの?」と、言われた。

お料理が出来ない父と弟のために、

16×16

ついた。母がいなかった生活の事を、いっぱい話した。母は、たくさんのおみやげを買って来てくれた。二か月後、イーパが退院した。それから一か月、夏休みが来て、母と弟と、日本に行った。すごく元気になったイーパと、アーマ(おばあちゃん)が、「いらっしゃい。よく来たね。」と、おうちの門で、むかえてくれた。

補習校の放課後クラブで、弟と初めて習った「しょうぎ」を、イーパと一緒に遊んだ。イーパが強すぎて、一度も勝てなかったけど、最後に良い勝負になって、「上手になったなあ。」と、言ってくれた。おうちのお庭や、近所の公園に虫とりに行って、

16×16

初めてご飯を作ろうと思った。母の「いりたまご」の真似をしたら、さとうと塩をまちがえて、とてもからくなってしまった。「オムレツ」を作っている時、弟に呼ばれて、火をつけっ放しのままテレビを見ていて、火事になる所だった。母と、電話で話した。夜おそくまで、話した。初めてのお料理の失敗を言うと、母はおこらず、「すごいね。えらいね。ありがとう。」と、ほめてくれた。弟は、「あと4回ねたら、ママ帰って来る?」と、きいていた。母が帰って来るのを、待ちきれなかった。

十日間がすぎて、母が帰って来た。私と弟は、走ってギュッと、だき

16×16

たくさん虫をつかまえた。虫が大好きな弟は、あみを持って、大よろこびだった。日本の焼き肉屋さんや、とんかつ屋さんにも、みんなで一緒に出かけた。久しぶりで、とてもおいしかった。イーパの大きな病気が治って、本当に、本当に、安心した。

16×16

平和の森アスレチック公園

渡邉　喜

ぼくは今年の夏休みに、日本へ行きました。日本では東京で、平和の森公園フィールドアスレチックに遊びに行きました。この公園に行くのは今年で三回目です。ぼくはいとこと弟のけいくんといっしょに行きました。いとこがどうしても行きたいというので、たので行きました。アスレチック公園にはエリアが2つあって、遊具が40こあります。水の上のエリアと地面にあるエリアです。のぼる、下りる、わたる、スライドする、いろんな事をする遊具です。ぼくはここで去年はできなかった事が今年で色々とできたので、これを書く事に決めました。

まずは、水の上を木の板に乗ってロープを使って渡るアスレチックです。去年は、じゃんけんぽいをしてぼくが最後になってしまいました。みんなが行った後、ぼくが最後に行く事になりました。そうしたら、みんながどこにいるのかと思って、よそ見をしてしまいました。板が右に行き始めて、左に行こうとしても右に行ってしまうので、後ろから水に落ちてしまいました。その時は水が冷たかったし、知らない間に落ちてしまったのでびっくりして泣いてしまいました。はずかしくもありました。今年、ぼくは二番目になったので、よそ見をしないですみました。ゆっくり、ちゃんと落ちないで陸につけました。

次は、二つの木でできた高いタワーがあみでつながっていて、そのあみの上を渡らないといけないもう一つのアスレチックです。去年行った時、ぼくはタワーが高すぎてあみから落ちるのではないかとこわすぎてのぼれませんでした。でも去年から今年にかけてたくさん運動をしたので、今年行った時はなんだか自信が出て、のぼってみたらぜんぜんこわくなかったのです。渡った後は、とてもほこらしい気持ちでした。

この平和の森公園フィールドアスレチックに行ってぼくは、失敗は成功のもと、まかぬたねははえぬとわかりました。これからもアスレチックでも人生でもくじけないようにがんばりたいと思います。

私はきのこ

L工校　初等部　五年一組

市川　華

私はただの赤いきのこです。森のおくに住んでいるきのこです。私は食べられるきのこですって言われるのを待っているのが退屈で、何もすることがないのです。アリさん達とハチさん達が楽しく一緒に遊んでいるのがうらやましいな。いつも動いて、はねて、笑っているんだもの。私もそうだったらいいな。でも私はふつうのきのこです。

「いいなぁ。アリさん達、アリの生活は楽しい。」

と私は聞きました。

「もちろん。きのこの生活はどうなの。」

「アリの生活とちがってつまんないよ。朝も昼も夜もずっとすわっていなきゃダメなんだもん。アリさんの方が楽しいよ。」

「でもどうしてきのこさんは動けないと分かるの。ちょっと歩いてみてごらん。」

「ハチの君達は、はちみつをおれにくれない

かな助けないよ。」

タヌキとキツネは、

「きのこなんかどうでもいいじゃんか。」

と助けてくれませんでした。

しかしその次の日、人間が森のおくにハイキングにやって来ました。人間はクマやキツネよりももっと強いです。人間がだんだん近づいてきたから、私はドキドキしました。

その時です。小さな子が私を土から引っ張りました。大きな目がきらきらしていました。でも急にもっと大きい手が、小さい手をパッチンとたたき落としました。

「毒きのこだよ。何を考えているの。ダメでしょう。」

私はそっと立ってみて歩き始めました。私はやっと自由です。なぜか涙がもっと書く見えました。後ろからアリさんとハチさんとスズメさんが来ました。

「あ。きのこさん、歩いてる。よかったね、

とアリさんに言われました。そして、私は一生けん命くねくねと体を動かしました。でも、歩けませんでした。私の足は土の一番おくに入っているからです。

「もしかして足を土から出せばいいのかな。」

そしたらきのこさんは歩けるよ。

と、となりに住んでいるスズメさんが思わず言います。ハチさんは、

「あ、そうだね。だれか大きくて強い動物がきのこさんを引っ張ったらいいんじゃない。」

と言いました。

「明日、今の時間にここで会おうね。大きくて強い動物をさがしてあげようね。」

とアリさんが言ってくれました。みんなが一緒に、

「おう。」

と大声でさけんでそれぞれの家へ帰りました。

次の日、スズメさん達とアリさん達とハチさん達が森のあちこちへ行って、大きくて強い動物をよびました。でもクマは、

きのこさんね。

アリさんがにこっと笑って言いました。

「もう退屈ではないでしょう。」

ハチさんがブーンブーンとあちこち飛びながら言います。

「よかったね。歩くだけじゃなく、もっといろんなことができるよ。もうすわっていなくていいんだもん。」

スズメさんは言います。

私は歩けるきのこになりました。これから私は旅に出ます。きっと長い長い旅になるでしょう。

やさしいと思った事

L工校　五年一組

イスラス　ダニエル

「パパが車にひかれて、今病院にいるよ。」朝起きたら、お母さんがぼくと妹にいいました。

「でも、大じょうぶみたいよ。」

ぼくは、とても心配になりました。

学校から帰って、ぼくは、

「お父さんは？」

と聞きました。

お父さんは、夜、歩いて青信号をわたっていました。そして、赤信号を無視した車にひかれてしまいました。左足の骨が、ひどく折れてしまいました。治るのに、3カ月から6カ月もかかるそうです。

ぼくは、とてもおどろきました。お父さんは、二度と歩けないのかと思いました。心がいたくなりました。

何日かして、お父さんが病院から帰って来

20×20

ました。ギプスをしていて、いたそうでした。歩行器を使って、少しだけ歩いていました。おふろも入れず、お母さんが手伝っていました。まるで赤ちゃんのようだと思いました。

「お父さんが、小さく見えるなあ。」

とぼくは言いました。

足の骨が一本折れただけで、どんなに大変かわかりました。

お父さんは、歩けません。車にも乗れません。仕事に行けません。助けが必要。どこにも行けません。

ぼくは、たん生日がクリスマスに、アイフォン6Sがほしいと思っていました。でも、すぐには買えないと思います。ぼくは今、私立の学校に行っています。もしかしたら、来年は、公立に行かないといけないかもしれません。いろいろ心配になってきました。

でも、いい事もあります。お父さんがけがをして、大事な事を学んだと気付きました。回りの人が、どんなにやさしいか、分かりま

20×20

した。

友達がぼくの家族に、クッキーやフルーツバスケット、メッセージカードを送ってくれました。お見まいに来てくれた人もいます。心配して、日本とメキシコのおじいちゃんやおばあちゃん、メキシコのいとこ、友達やゴッドマザーから電話がありました。

ぼくも、サンデースクールの友達から、カードをもらいました。うれしかったです。

悪い事があったけど、みんなが心配してくれて、いのってくれて、ありがたいです。

ぼくは、お父さん、お母さんの手伝いをもっとしてあげようと思いました。たん生日プレゼントも、えん期して買ってもらっても、いいと思います。

十月十三日は、お父さんのたん生日でした。手じゅつが成功し、お父さんは三日前に退院しました。家族みんなで、家でお祝いしました。特別なたん生日のお祝いになったなあ。

と思いました。

20×20

お父さんが生きていてよかったと、初めて感じました。

20×20

ハンガーゲームを読んで

五年二組　福島　光

中学にあって初めてクラスで課題に出された本がハンガーゲームだった。とても面白くて一週間ぐらいで読み終わってしまった。

心をおたれたのは、キャットネスが自分の命をぎせいにしてまで妹を生かそうとしたことだ。妹が命をかけたゲームに挑戦したのだ。

ぼく自身のことを振り返るとはずかしい。毎日毎日妹とけんかばかりしていつも母にしかられている。でもこの本を読んで、兄妹が困っている時は立ち上がって助けてあげなければいけない、と強く思った。

一番心にのこったのはキャットネスは自分の命をかえりみず、自分の家族たち、やたくさんの仲間を助けたことだ。本当だったら自分の命が一番大切なはずなのに、キャットネスは、ハンガーゲームで勝ち残ることを目標にはしていないのだ。人一人を助けると言うのはなみたいていなことではないのに、それをやってのけてしまったキャットネスの意志の強さにおどろいてしまった。

ぼくは体力や技だけでなく精神力を強くするために柔道をやっている。試合の時はまさに、ハンガーゲームと同じだ。気を抜けば一本取られるし、きんちょうしてあがってしまえば手も足も出なくなってしまう。それに立ち向かうには、練習を積み重ねることで自信を持つことだと思う。そして経験を積み重ねることで、こちらを勝利に導く動もされるのだ。

キャットネスから本当の意味の人生の勝利者はどうあるべきかということを学んだ。本物のヒーローだ。

旅行

W校　五年一組　鳴瀧　優希

ぼくは、アメリカに来てからアメリカ各地を旅行しました。メイン州やフロリダ州、カルフォルニア州にも行きました。旅行では、そこでしか出来ないことを体験できるので、旅行が大好きです。歴史のことを習ったり、自然とふれあったり、動物に会ったりしました。

ぼくは旅行するとき、よく歴史のことを学びます。有名な人やアメリカ全体のことを知ることができます。アメリカに来て最初に行ったのは、独立せん言の行われたフィラデルフィアです。そこで見た「自由のかね」はとてもおおくて、大きなひびがありました。その時は英語があまりできなかったので、説明は良く分かりませんでしたが、アメリカの始まりを感じました。

アメリカの首都、ワシントンDCにも行き

ました。そこで、アメリカの歴史がもっと分かりました。ホワイトハウスに行って、たくさん写真をとりました。二回目にはフォードげき場に行き、リンカーン大統領がしゃ殺された時の様子を学びました。でうして人を殺すのだろうと思いました。

旅行では、必ずしも頭を使うわけではありません。時々動物とふれあったりして、楽しむ時もあります。フロリダでは、マナティーと一緒に泳ぎました。マナティーは思っていたより大きくて、大人になると二・四メートルから四メートルにもなるそうです。マナティーにさわったらとてもなめらかでした。

ホエールウォッチングにも行きました。一度目はメインで行こうとしましたが、風が強くて中止になってしまいました。とても残念でしたが、ボストンで再チャレンジしました。きりが深かったので出航するのか心配でしたが、無事に見ることができました。大きなくじらが近づいてきた時、尾びれの形が絵と同

じで、やっぱりこういう形をしているのだなと思いました。

旅行では自然とふれあうこともあります。鳥の声を聞いたり、よい空気をすったりします。アカーディア国立公園ではサイクリングをしました。こう葉でいっぱいの木々が湖に反し、して見えました。湖にうつった真っ赤な木々が本物そっくりで、鏡みたいでびっくりしました。

ぼくはたくさんの国立公園に行きましたが、その中でも世界いさんでもあるグランドキャニオンが心に残りました。谷がとても深くて、下を見ると体がふるえそうになりました。早起きして日の出も見に行きました。とてもきれいで絵を見ているようでした。

ヨセミテも世界いさんの一つです。そこには有名なたきが四つあります。木々の間からとおくにたきが見えて、近づいて行くと水しぶきでにじが出ていました。近くで見ると、たきの高さに思わず口が開いてしまいました。

次はアラスカ州に行って、オーロラを見る予定です。絶対に見ることができるとはかぎらないので、少しドキドキしています。写真で見ると、いろんな色がありとても美しかったので、アラスカに行くのが待ち遠しいです。これからも、アメリカ各地を旅行してみたいです。そしてアメリカのことをもっと知りたいです。

20×20

「網引き」

ニューヨーク補習授業校　五年二組

兎尖　七海

「赤組勝てよぅ」。

「白組負けるなぁ」。

色々な所で、応えんの声がきき起こる。かんかんと照りつける太陽の中で、今、行なわれているのは、運動会だ。

「みな様、次の種目は綱引きです」。

キンキンのアナウンスが流れた。そして、私達は歩き始めた。真ん中にポツンと置いてある、じょうぶそうな、なわを目指して。

「早く」。

せかされながら、それぞれの位置についた。

「位置について、よぉういー…」。

私は歯をぐっとくいしばって目をつぶった。

「どん！」。

息をすいこみ、思いきり引っぱった。全体重を綱にのせる。ぐうっと引っぱられたが、引っぱり返して…。

「ピン、ピン、ピィーッ」。

けたましい音が聞こえた。数秒間、じっとしていた私は、

「一回戦は、白組の勝ち」。

という声を聞くと、やっと顔を上げる気になった。そして、また綱引きをする。ぐっ、と引っぱったが、つる。とすべって転んでしまった。それと同時に、白組が負けてきた。そして、ぐいっと強く引かれてべちゃっと何人かが転んだ。と、その時、

「ピァ、ピィーァ」。

という音がした。二回戦は赤組だった。みんな顔が真っ赤で、肩で息をしていた。中には、

「私達、良くがんばったよね」。

とはげまし合う女の子もいた。私はとてもくやしかった。しかし、友達と話していると、いくらか気は楽になった。すずしい風が静かにふき、私の重い体をおしてくれた。その風にはげまされ、元気良く席にもどれた。

20×20

来年は、最後の運動会だ。私は、来年こそはいい思い出を、と胸の中でいい聞かせながら、そっとあせをふいた。

20×20

「人形の世界へ」

L工校　六年一組

猿見田　美星

「プラボーイ。」

国立マリオネットげき場はくすぐであふれました。七人の人形使いがそれぞれマリオネットを持ってぶ台裏から前に出て来ました。それと同時に観客のはくすぐは益々大きくなりました。

八月五日、チェコ共和国のプラハでの最後のタ方でした。私は家族と一緒に国立マリオネットげき場に「ドン・ジョバンニ」の人形げきを見に行きました。ドン・ジョバンニは実話をもとに、一七八七年にモーツァルトが書いたオペラです。同年モーツァルト自身の指揮でプラハのエステートげき場で初演されたので、今も毎日のようにプラハのあちこちのげき場でオペラ、オーケストラ、人形げきが上演されています。

人形げきは子供向けのイメージがありますが、プラハでは芸術としてとらえられていて、子供だけでなく大人も楽しめるものとしてとても人気があります。かつてプラハがハプスブルグ家に支配されていた時代、ドイツ語が強要されていましたが、人形げきだけはチェコ語で行う事が許されていました。それでチェコの伝統文化を守るものとして人形げきが盛んに上演されるようになったのです。この国立マリオネットげき場では一九九一年にドン・ジョバンニが初演されました。しかし私達が観たのはチェコ語ではなく、イタリア語でのオペラのレコーディングを使ったものでした。

国立マリオネットげき場はスメタナの「モルダウ」で有名なヴルタヴァ川の近くにありました。古い石の建物で、入口の床にモザイクでD。n・Giovanniとはめこんでありました。ドン・ジョバンニはこのげき場の為に作って、上演されるほとんどがこの演目だからだろうと思いました。げき場は地下にあり、私達は暗い階段を下りて行きました。外はとても暑い日でしたが、げき場内はとても涼しく、とても静かでした。げき場は大きくはなく、お土産用のモーツァルトのマリオネットやパンフレットを売っているブースがありました。パンフレットは日本語のものもあり、日本人もよく来るのだろうと思いました。

まだ時間が早く私達が一番だったので、一番前の席に座りました。ぶ台の赤いカーテンの後ろで人が動いているかげが見えました。私はパンフレットを読みながら、ワクワクして早く始まらないかと思っていました。だんだん客席がうまって来ました。ほとんどは観光客のようで、日本人も沢山いました。

やっと上演時間になり、モーツァルトのマリオネットの指揮でドン・ジョバンニが始まりました。カーテンが開いて他のマリオネット達が動き始めました。私が一番驚いたのは、人間が演じていなくても、実際に起こっている様に見えた事です。木ばりのマリオネット

20×20

が人形使いに操られると、まるで本当に生きている様に動き出しました。マリオネットの表情が変わるわけでもなく、衣装もずっと同じままなのに、手足や頭の動かし方でその時その時のマリオネットの気持ちが伝わって来るようでした。またぶ台装置や照明も考えられていて、その場のふん囲気が良く出ていました。人形げきでオペラが出来るというのは新しい発見でした。マリオネットが本当に生きている様に動かせる人形使いはすごいと思いました。と中から私はげき場の席に座わっていることも忘れ、マリオネットの世界に入っていました。

人形げきは実際のオペラそのままにやったので、インターミッションもあり、上演時間は二時間半をこえました。そんな長い時間でしたが、あっという間に時間が過ぎて行きました。

「ブラボー！」

人形げきが終わると国立マリオネットげき場

「120秒間の経験」

NY補習授業校M校　6年2組

シュワルツ　世音観

その日の川は、激しく流れていました。岩と岩の間には、波が台風の風のようにゴウゴウと音を立て、ラフトのふちに座っていた私の目のすぐそばまで、高く波打っていました。

「これから一人ずつ川に飛び込んで、あの岩の近くまで行ったらロープを投げるので、それにつかまって下さい。私が岩まで引っぱりますよ」とガイドのマーシーさんが言いました。

「えー、この激しい川の流れの中を、そんなに遠いところにある岩に向かって泳ぐのー」と私は思いました。私の心臓は、目の前の川の流れとおなじくらい激しく、ドキンドキンと動き始めました。

最初に川に飛び込んだのは私の母でした。母が川に飛び込むと、あっという間に、川の流れに引き込まれていきました。一しゅん見

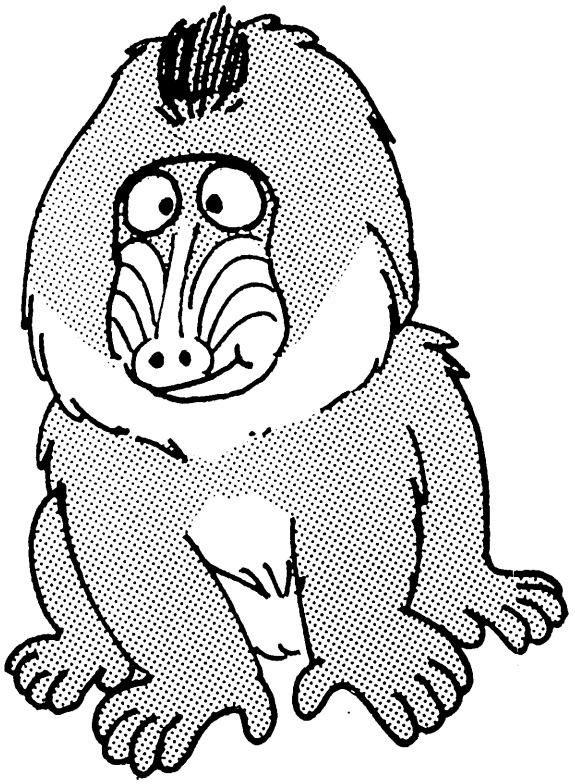
えなくなった母のヘルメットとライフジャケットが見えると、すぐに母は岩にむかって流されていき、ガイドさんが投げたロープにつかまりました。母はロープをガイドさんに引っぱってもらい、何とか岩にしがみつき、ハーハー言いながら、その岩によじ登っていきました。

次は、私の番でした。母の様子を見ている間に、私は、どんどん恐怖に包まれていきましたが、一方で、この激しく流れる川に飛び込めるという興ふんが、恐怖をはねのけていました。

私はラフトの縁に立ち、飛び込む用意をしました。「一、二、三」みんなが一首にさけんだものなど後、私の耳に全たく別の世界のまが聞こえてきました。それは、包まれた音の世界で、コポコポ、ブクブク、チュルチュルと言った音が重なりあい、さらに不思議な事に、不安と戦う私の心の声も聞こえてきました。

はは、く手であふれました。七人の人形使いがそれぞれマリオネットを持ってぶ台裏から前に出て来ました。観客達は総立ちになってはく手を送りました。私も夢中ではく手しました。

カーテンコールが終わり、人形使い達がぶ台裏に帰って行きました。ぶ台に残されたマリオネット達はまた元の木ぼりの人形にもどりました。



けれども、私は着ていたライフジャケットのおかげで、すぐに川の上に浮かび上がりました。すると私はも楽しくて、楽しくて、一しゅん聞こえた心の不安の声は、すぐに消えてしまい、ブカブカ流れて行く自分をとても楽しんでいました。

次のしゅん間、目の前に黄色いロープが水の中を泳ぐヘビのように、私の目の前を横切って行くのが見えました。私はそれを命がけでつかみ、しっかりと両手でにぎりました。

その後は、ガイドさんに言われた通りに、体をあお向けにして、つかんだロープをはなさないようにしっかりと持ち続けました。そして、私は川の流れにさからいながら、真すぐ体をのばしたまま、ロープに引っぱられて岩にたどり着きました。

そこには、先に飛び込んだ母がいて、うれしそうに、少し不安そうに私を迎えてくれました。ふり返ると、今さっきまで私がいた上流で、涙にもまれるラフトの緑に、妹が飛び込む準備をしているのが見えました。

20×20

3/4

20×20

4/4

涙の支え

中等部二年一組　加藤和樹

少し長く感じるほんの一分や一秒の間、ぼくは「ニューヨークへようこそ！」と英語で書いた手作りの看板を強く握り締め、時計の針が十時四十五分を指すのを待った。

日本から来る僕の一番の親友、ショウキとの一年ぶりの再会の日がついにやってきたのだ。一年前まで毎日一緒に過ごしたショウキなのに、なぜか僕は緊張して、「あれからどれだけ変わったのかな？」、とか「会った時になんて言えばいいかな？」などの質問が頭の中をさまよっていた。

その時だった。僕よりほんの少し背が高い、一年前買ったおそろいのアディダスのジャンパーを着たショウキが到着ロビーから出てきた。僕は思わず働動的に看板を投げ捨て、ショウキへ走っていった。一年前の出来事が全部よみがえるかのような瞬間だった。前まで僕より背が低かったのが一センチ追い越されたぐらいで、中身は相変わらずほんわかとしていて安心した。これは最高な夏休みになる事が最初から確信できた。

僕とショウキは相変わらず気が合い、笑いが絶えない十日間だった。シティーを歩いてる時も、夜寝る時も、お互い話す事がたくさんあって話がやむことがなかった。バスケや、野球や、五十メートル走などのスポーツも、まともにやって良い勝負なるライバルでもあった。そうやってのんびり話す日やスポーツして汗をかく日もあれば、いろいろな場所へ出かける日もあった。ニューヨークシティーを探検してお土産を買った時。バウンストランポリンでできた部屋で飛んだりはねたりした時。ブロードウェイで迫力満点のオペラ座の怪人を見た時。そして一番記憶に残った、ホームランボールがたくさん飛んできて十三対五で勝ったヤンキースの野球の試合。

そこでおそろいのフラットハットも買って、最高な思い出になった。

思い出もたくさん増え、絆もより深まったところで、十日間は終わりに近づいていた。最後の日の前の夜、僕たちは庭の外にテントをはって星が輝く夜空を見上げながら、中一の頃の思い出を振り返ったり、クラスのことを話したりして寝た。

最終日、僕はショウキを見送りに空港へ行った。とても寂しかったし、いつまでもこの十日間が続けばいいのにと思った。だが不思議なことに、涙は出なかった。一年前、僕がアメリカへ転校する時、四人の友達が見送りにきてくれた時にはあれだけ後で飛行機で泣いたのに、今回は涙一滴も出なかった。もちろん僕が成長したのもある。だがそれより、「またすぐあえる」という気持ちが大きくあったからだと思う。実際にまさか一年で会えたという事実と、今の時代では簡単にメールやラインでつながっていけるということが僕の支えでもあった。だからいつかまたすぐ出会う時が来るためにも、ずっとつながっていたいと思う。

夢のカタチ

L工校　中等部二年一組
山口　百音

幼い頃から学校の先生や友達に聞かれる質問がある。「将来何をしたいのか」という質問だ。つまり将来の夢は何かと聞かれる。私はいつもそういう時、何て答えればいいのか分からず、困ってしまう。周りはみんな具体的な職業などを答えるので、私もやりたい仕事は何か考える。だが、今まで一度も本気でやってみたいと思った職業がないのだ。だから私はいつも楽しいだろうと思った仕事を「夢」だと言っていた。

例えば、初等部の時に作成した卒業アルバムにあった「将来の夢」というページ。その時の私はなんとなく「面白いかもしれない」仕事を選んだ。だから建築家、イラストレーター・そしてパティシエと書いた。今はなぜ正直に「まだ決まっていない」と書かなかったのだろうかと後悔している。誰もが職業をもしれない。でも私はそうやって変わっていくのが、夢の良い部分だと思う。些細な夢だったものに進んでいくと案外楽しかったりして、夢が膨らんだりすることもあるだろう。自分で「楽しい・やりたい」と思う事を発見するこの行為が大事だと、私は感じている。誰かに言われて何かをやるのではなく、自分でやる意思を持たないと、物事はそう上手くいかないと自分の経験から学んだからだ。

20×20

夢にする必要はないと気づいたからだ。

今思えば卒業アルバムを作っていた頃の私にはちゃんと「夢」があった。それは職業という形ではなかった。2020年の東京オリンピックが決まったというニュースを観て、オリンピックで通訳ガイドのボランティアをしてみたかったのだ。ちょうど高校を卒業するのが2019年、2020年は大学生。きっと夏休みを日本で過ごしているだろうと思う。昔から人の役に立つのが好きで、そういう夢を持っていた頃もあった。今の私が誰かの役に立てるなら英語の通訳というのが一番高い可能性だ。今ある能力で夢を持つ必要はないが、私の場合は能力から目標を立てることができた。このように、夢をみつけるきっかけもみんなそれぞれ違うのだ。

今の私が持ってるこの夢は、達成しようと向かっていくうちに少しずつ違うカタチになるかもしれない。一つの夢だったものが他の夢に繋がったり、あるいは別の夢に変わるか

20×20

「私のおばあちゃんは高齢者」

中三　中村夢乃

今年の夏、石川県に住んでいるおばあちゃんに会いに行きました。今、おばあちゃんは一人暮らしです。三年前におじいちゃんが亡くなったからです。グラウンド・ゴルフで優勝したり、家の裏の小さな畑でたくさんの野菜を作ったり、いつも休むことなく活発に動き回っています。能登の千枚田に行った時も、灯台への坂道を登った時も、だれよりも一番足が強くて元気でした。でも、私は、ふとこう思いました。「もし、おばあちゃんが病気になったらどうしよう。急に倒れたらだれが助けてくれるんだろう」と。私は、とても心配になってしまいました。

中一の時、地理の授業で、日本では人口の割合の中で高齢者がとても多いことを学びました。日本の社会は、人口ピラミッドがつぼ型になっています。世界の他のどの国と比べても、高齢者が若者よりかなり多くなってい

20×20



ます。確かに、どこに行ってもお年寄りの姿をよく見かけました。普段は全く気にかけたこともなかった駅の階段、デパートの中の移動、観光地の施設など、年齢にかかわらずですが、健康な人でないとなかなか行動しにくいかもしれない、と感じました。特に、高齢者の数がどんどん増えてくるこれからの日本は、今までとは違う視点から考えた、高齢者が生活しやすい社会環境をつくる必要が出てくると思います。

おばあちゃんは、自分で車の運転はしません。いつも歩いて、あるいは自転車で買い物に行きます。病気の時はどうするのでしょう。足が悪くなったら、食べる物も一人では買いに行けなくなってしまいます。近くに親せきはいますが、皆高齢です。二人の息子は、一人は私の父でニューヨーク住まい、もう一人は埼玉県に住んでいます。何かあってもすぐに駆けつけることはできません。

一人住まいのお年寄りの記事は、新聞やテレビの特集でもよくとりあげられています。今後、高齢者の問題はもっと多くなるでしょう。その問題は、私のおばあちゃんの問題でもあります。一人暮らしの高齢者を定期的に訪問する。買い物のヘルプ、話し相手になる、など施設環境を整えるだけではなく、心のケアにも地元の協力が必要になってくると思います。高校生のボランティアも一つのアイデアかもしれません。

一年に一度しか会うことができませんが、離れて暮らしているおばあちゃんが、もっと年をとっても安心して毎日暮らせるような社会環境ができればいいな、と思います。私も自分に何ができるのか、ということを考えさせられた日本の夏でした。